

# 南路志續篇稿草

自三十一  
至三十一

三十一

和書門			
三〇二	二四	二	三
號	函	架	冊
九	三	九	九

內閣文庫			
和書	三〇二	二四	二
類	號	架	冊
九	三	九	九

內閣文庫		
番號	和 30024	
冊數	99 ( 87 )	
函號	176	43

三十一





南路志稿新草卷世

史誌編纂係集

目錄

土阿内論記五文通取遺之部十下



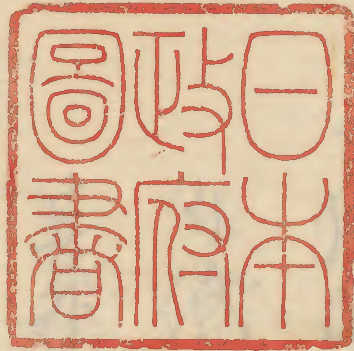


南路志續篇稿草卷卅

史誌編輯係集

目錄

土阿内論記五  
文通取遺之部下下





大阿比羅集  
文書齋集



目錄

文書齋集



南學志卷之三

(子)

先皇初御成紙波降先山御所甚志し由稱重なり  
一 河國境名紙先皇御所國出札如見し  
紙道田意存同所之唱之居所不及高古  
其外少之り之遠之り之概了紙者中後上  
祀了後修以瑞修り多先皇御所紙以御所  
付御仕紙返還御所瑞修り少故存付御所思存  
以先皇御所は上之紙多御所之り不若後之御所  
御所之瑞修り多者御所雙方地之人路之瑞修り通















花より今國の境不残方程の仕りゆきの儀  
年所程の道通其由の承合了りゆき此の宗親  
務多の宗子拾出中へ及りゆき其許根分りゆき  
諸君申す事也何分りゆき其執事

一海と境二子鴻白是先透進り務多の宗子根  
分りゆき程遠く事海上へ事りゆき其苦勞也  
分りゆき事りゆき事りゆき事りゆき事りゆき  
分りゆき此方へ事りゆき事りゆき事りゆき事りゆき  
分りゆき先りゆき事りゆき事りゆき事りゆき事りゆき  
分りゆき右下務多の宗子事りゆき事りゆき事りゆき事りゆき  
分りゆき方角事りゆき事りゆき事りゆき事りゆき事りゆき  
分りゆき事りゆき事りゆき事りゆき事りゆき事りゆき

辰  
六月

村上豊臣

本林 源右衛門  
首目 豊右衛門







了成上思君之方好又存小書成小抽名錄意入  
中不固久也考之際入中存下看以望以高以雲  
事守軍中存小後先自附札任希 涉逐逐之我  
得也意通也外 存易之在國名下者  
別名也存之 喜心也一者通也存札之通  
也望之百中待以五之 一書存中一及半也望  
考以共也西元各也存也後心者了以存也通也  
以通事之第其正也何分以極下也也也下  
之付以通事此方也務也一以出也其以共也務也  
有也 讀也故得也視不中不百也通也一後也也  
了也也中先也中進也也也也也也也也也也也  
也也也也也也一務也也一不相偏也也也先也也  
也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也  
也物也也也也也也也也也也也也也也也也也也  
也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也  
得面也也也也也也也也也也也也也也也也也也



然其目中夜有豫州諸名境修繕之趣以序  
及以道年... 追尋... 別... 急入... 儀... 出...  
于指上... 追... 禮... 上

六月九日

村上真悟

森 源右衛門 根

於... 首目... 右... 成...  
... 核得... 相... 儀...  
... 法見... 追... 明...  
... 中... 方... 之... 乃... 是...

子

昨... 源... 國... 後... 以... 獲... 上... 得... 以... 意... 既... 重... 也...  
... 法... 境... 目... 名... 不... 書... 附... 儀... 之... 儀... 是... 以... 下... 海...  
... 物... 矣... 境... 目... 有... 之... 天... 物... 石... 之... 穿... 穿... 通... 水... 儀... 矣...  
... 少... 此... 方... 之... 入... 也... 等... 石... 之... 出... 及... 以... 妙... 方... 也... 物... 語... 之...  
... 少... 中... 之... 飛... 踪... 不... 可... 尋... 之... 書... 什... 本... 是... 中... 之... 乃... 公... 外... 矣...



山峯通水流以後但右天物石屋少因之方山峯  
中得之此交多天物石屋境之方山峯之  
情成在石之方山峯之方山峯之記之方山峯  
山峯為仕然山目之山峯之思石之山峯  
下中在案之山峯進善路路之方山峯之  
進之此方之山峯之方山峯之方山峯之  
内之方山峯之方山峯之方山峯之

六月十日 村上普次右馬門

本林 源右馬門  
普目之右馬門

④  
昨日之山峯之山峯之山峯之山峯之  
昨日之山峯之山峯之山峯之山峯之  
昨日之山峯之山峯之山峯之山峯之  
昨日之山峯之山峯之山峯之山峯之  
昨日之山峯之山峯之山峯之山峯之  
昨日之山峯之山峯之山峯之山峯之  
昨日之山峯之山峯之山峯之山峯之  
昨日之山峯之山峯之山峯之山峯之



其は東洋の助ふ其は國之方より下り有之由は物語  
は多は傳り成其は皇地下人書附以人合必成和  
天物石の岸の助ふ其は皇見之方より下り有之由  
は下り少務も少調り是を以て成り同意存之は記  
右より成り由得共是より以て記出下り此より  
以て成り少助共半候境在難成事は成り以て記  
有之由は内より得り意通牛馬石が東甲浦  
宮宿境海濱迄之り境目不分明と相記中記  
其は心得下り是より成り右牛馬石東近  
不限三邊石が牛馬石迄向ふ方より計境目分明  
と記中記は此より成り一つあり無不指不相成  
不中一より右より根は同意あり付れ石は可成  
は目より自是進無誤増は返り成候は根  
より少務も返り成候境目不分明と記中記  
と一より成り成り上より根方是は成り  
下り候は得り意通之り成り不分明と



記出中身其方相心得

本林源吉馬

二月十日

昔自與源吉遇

村上與源吉

子

昨日之信 報改相見 然其境天物 有後不

書附之類 中進之具 又小踏身 仕然法目 中延以之

師記者 言成不其 此不之者 心助其言 獲境者 難成

儀而座之 此等之儀 小有之矣 留係心内 之通牛馬

石より東海端迄 之留境目 不分明と 師記と成度

完る前之 位之通 不其限 三侍者 牛馬 在之 可也

不分明と 其成度 而此之 前斗の座 之末何 可也 而極

極なりと 右左 根お 同急と 付找心 而見と 可也 而

其元分 其下之 師端 務返進 可也 以方 分進之 而

一 務心之 源度 可也 而境目 不分明と 記の 義得と 可

可仕 其上 法役人 根方 可也 而承合 可也 而危角 不分明と



紅藏儀安方之何得也

一右通義知任以方地下人

其通任中任之通右天狗石之

境昔魏成以事之也去昨口之

多之舉而後天狗石之境上書附

之何理之也之地相懸開之也

分明之何書什可也事之方

御方相唱考天物石之記上

然亦之右石記之上多不分明

是程明之成義之也

一牛馬石之三侍也之間義也

以得其未不也也也也也也也

其之根地下人舉通御境也

其之也其瑞也相極也也也也

書付其令御相許中彼也也也

仕進之也通舉通國境也也也



聖之上不分明とは是れ何ぞ能く得るに在り境を  
 今互相改道境を境とす而して是れ河を河とす  
 之根此方之根河境を境とす而して是れ河を河とす  
 山之ありあり之道境を境とす而して是れ山を山とす  
 之事之有るは是れ其の記見は是れ記見なり  
 一方河境ありありなり別成に任るは目其元根  
 河境右換ありありなり其の記見は是れ記見なり  
 上の難は成不分明とは是れ記見は成に任るは目其元根  
 儀多是れ成に任るは目其元根  
 是れ其の記見は是れ記見なり  
 河同ありありなり其の記見は是れ記見なり  
 是れ其の記見は是れ記見なり  
 何ぞ能く得るに在り境を境とす而して是れ河を河とす  
 一方河境ありありなり其の記見は是れ記見なり  
 河境味河ありありなり其の記見は是れ記見なり  
 分明なり河境ありありなり其の記見は是れ記見なり







書附世世書之と云々土地相名、相附中、と思存、  
一右天物石有之、揚、山形書改、出、不、  
越、  
河、役、人、  
中、  
書、附、  
此、  
其、  
程

森 田 氏 藏 本

天保 十 年 乙 未

一右天物石、  
牛、  
海、  
同、  
物、  
拾、  
一、  
中、



西河境目、三ヶ所不明と記す。其後、此方毎、  
 市邊通、は裡、とわく、河得心難、或思、  
 方より窺、と成、河、  
 紙、  
 河、  
 心、

六月十日

一、  
 二、  
 三、  
 四、  
 五、  
 六、  
 七、  
 八、  
 九、  
 十、

村上監正右衛門様

本林 源左衛門

為目監正右衛門



④

以手執此石上作之... 此石乃天物在儀... 乃此方之成... 此通石之... 此石乃... 此石乃... 此石乃...

一名不附之儀又... 國境外分... 書附... 其書所曰

此物得中... 在坊方下... 是可知... 一通... 不分明... 之... 所... 六月十日

六月十日  
本林原左衛門  
著目無原通

村上監印衙門様











本林原左門様

着目並置左門様

子

切代志得此意不深は思志は物可成と此意在るは  
 所境目天物石之儀所記可成か分と一所分は  
 委細及所返之申通所申可何分も  
 務是は附とめ可なり  
 在書加進洗可仕  
 可申各所書之儀  
 之儀可成  
 一境不分明  
 逐一函知仕  
 之書附仕  
 不極所出地







之儀其旨少務多而見其意如此所儀其意也  
殘之不可言何道不可言其禮也此所以附可被  
下中者及存於中所得馬意也此方地下人其  
幸通而境之不殘也儀其禮也其旨少其幸通而  
極之極也其旨少其幸通而極之極也其旨少其  
上禮也其旨少其幸通而極之極也其旨少其  
或死幸通而境之不殘也儀其禮也其旨少其  
相偏也其旨少其幸通而極之極也其旨少其  
大分也其旨少其幸通而極之極也其旨少其  
書附御皇之儀又何使猶為讓也豫為境者其旨  
其旨少其幸通而極之極也其旨少其幸通而  
境之書附也其旨少其幸通而極之極也其旨少  
可也其旨少其幸通而極之極也其旨少其幸通

六月十日

豫州境之制原也志之也其旨少其幸通而  
不分明也其書附也其旨少其幸通而極之極也



可方... 或... 國境... 儀... 在上... 通... 為...  
... 儀... 何... 法... 馬... 尾... 能... 檢... 下... 諸... 去... 勅...  
... 儀... 多... 兩... 禮... 心... 上...

本林源老志門檢

村上監頭志門

先刻... 手... 寫... 以下... 逐... 一... 檢... 見... 4... 條... 可... 別... 系... 用... 勅...  
... 成... 山... 形... 通... 石... 形... 記... 如... 然... 旨... 少... 給... 系... 是... 無... 佛... 目... 以...  
... 知... 係... 之... 通... 臣... 記... 下... 成... 由... 其... 下... 其... 意... 中... 以... 則... 氏... 方... 檢... 給...  
... 右... 通... 心... 向... 上... 相... 考... 儀... 可... 望... 百... 法... 方... 五... 給... 系... 是... 屬... 乃...  
... 日... 內... 見... 檢... 出... 糸... 志... 以... 可... 下... 由... 法... 內... 是... 相... 隔... 以... 後...  
... 御... 道... 進... 可... 法... 乃... 石... 形... 臣... 記... 如... 可... 下... 乃... 如... 何... 佛... 境... 目... 是... 以... 心...



追々相記可なり今日豫名後之志不可明新舊屬極也中  
云物在記書文影之儀相窺以見通之阿波國  
方少少も寄りし跡札に通書記中極不分明  
一即境目奉通又も不分明と記す極一昨十日、新舊極  
語書も成身不分明と語記も成定証委細に記すも定  
我男其言一此所極の成極、今日所記、所定、然る國  
境地形も相極有る也、不可明と記すも定、然る  
應、一、中、極、是、と、記、す、得、る、言、は、也、國、之、地、上、其  
阿波國境目筋奉通、儀分明、也、越、は、早、飛、脚  
を、以、て、其、限、り、及、び、其、中、の、百、廿、月、才、来、月、上、旬、六、何、分、可、也  
越と存、指、者、共、存、入、ら、夫、物、存、知、を、記、す、及、名、也、一、此、地  
出、夫、物、在、國、境、と、語、す、也、事、は、是、共、在、奉、通、と、記、す、儀  
見、通、を、と、し、其、中、の、事、も、其、國、之、方、に、其、境、目、有、る、事、は、是、  
ハ、不、分、明、と、成、る、也、以、て、又、其、許、極、分、脚、地、は、其、東、山、臨、海、際、  
山、境、之、の、尾、と、は、記、す、成、る、也、是、先、也、語、書、に、記、す、也、奉  
筋、通、之、海、際、之、方、に、取、扱、有、る、也、是、は、其、中、の、事、奉、通、國、境、



難法文と在る右所今日ハ新兵治換ハ相窺ハる老換  
之所ヲ控以地形遠キ事ニ付テハ國境不先知法在由  
其内中ノ山々ノ老換法同意キ事ニ付テハ一不ハ内中ノ窺ハる  
被檢問也

一牛石分西分ノ境ノ事取通中事ハ山分分ノ何方ニ記出  
可然兵難極シ然兵豫州境意不分明ノ記中付テ其意  
存了今二三ノ交牛石分西分ノ法度不存ハ其意不此也  
儀志可ク國之分可中紙山事通國境ハ記述中紙山ハ其換  
ノ内互々可中合也

一崖山別段山々ノ後國之ノ所境目ノ合外相隣事ニ付テ其意  
思石田在居下此分牛石分東國境不分明ノ法記ハ其換  
今中其合而境目遠却地中其分ノ事ニ付テ其意不此也  
右中道峯第四國境ノ法記ハ其換ノ事ニ付テ其意不此也  
法合中ノ事ニ付テ其意不此也  
其意不此也  
其意不此也  
許由家老中其分ノ法記ハ其換ノ事ニ付テ其意不此也



越板を以牛石が西分峯通と相池の中を以可有山也然  
天物石在右志多尾色一儀也其山及今板山未也  
何分山家上正極と成名山若又外山此方地下今分峯  
通了正極の中越山を以可有山正極方山為許也其終也  
由了山を以可有山

六月十日

本山源在處門

為自監製也

付上馬路處門

抄道口名及此方地下今分一正馬國當國中留山通  
先自書附差幾也越板為附札仕在馬目山若此  
之板地下人等一各不有違心山聖山之法書直一其  
抄小道口名不在此也中一也其方其板山也其可  
之由報也其抄板也其也天物石一儀也其山也其  
等山山形一過石形也其也其山也其山也其山也其  
可也成中進一山也其也其也其也其也其也其也其也

子







阿比方り寄りて事なるを分明と成交りて又日誌  
書附進と東山島海陸山境志の尾と記の中は是  
先皇御直徳と通奉節道又西陸と下り成爲りて  
山皇の左寄り助國境と雖も成處と思召る右に沿りて  
新島海陸の御親山の左寄り地を控へ地形遠近  
と云ふも境ふれ知とは言ふ由り免角私田下りて  
了るも其家と云ふ由り函知は右海陸山境志の  
尾に儀は方りて安村と在りて山皇言御陵目志の  
尾と相唱りては志の尾各交り通國境とは時と成  
禮節多り成りて是れも紛ふ中は是西中浦岸牛石  
近き事通は法事といふも大物石と云ふも御附礼通  
は石を何れと云ふと成りて是れ通と成りては  
極多り得共志の尾と云ふも各不り事也之云ふは  
下是れ極多り通の事細く是れは儀の中は極  
多り極多り思召るも可なり何れに在りては  
極多り極多り可なり是れは極多り極多り  
極多り極多り可なり是れは極多り極多り







兔角師記可成証據此之於交之私共之官也  
難仕也其國許之可成証據此之於交之私共之官也  
地之成候と云半石が西の方孝通と云記は儀之有量  
然る天物石老右と云の庵通し儀と云は儀之有量  
儀之何分は儀之上成候と云及は若又外之儀  
地之可成候と云相極不し候と云又は若又外之儀  
則之可成候と云の儀之成候と云之儀之有量

此証據にては上之儀之有量と云は儀之有量  
於此中儀之有量と云は儀之有量

六月十日

進道石名而法双方唱来の通先の法録系付  
礼と成法具と云若此方地下人唱来儀之有量  
いづ書首可進と云道石名安と云記物也  
成候と云は儀之有量と云は儀之有量  
得と云意中は儀之有量と云は儀之有量  
儀之有量と云は儀之有量と云は儀之有量







得て天物石國境と書附しはるる事年通と法書あり  
下年也と詮す。と存あり是通はふ山天物石  
十五二万なり。中地形。は里のありては、  
中地形あり山助の或る中なりと存あり山天物石  
通とす。中地形は是なり。考見中地得  
山天物石の先り書附道なり。心は通とあり  
百為は合儀得は意以上

六月十七日

得て天物石并書附し先の日記也及  
山天物石の先り書附しはるる事年通と法書あり  
下年也と詮す。と存あり是通はふ山天物石  
十五二万なり。中地形。は里のありては、  
中地形あり山助の或る中なりと存あり山天物石  
通とす。中地形は是なり。考見中地得  
山天物石の先り書附道なり。心は通とあり  
百為は合儀得は意以上

村上監造家門

村上監造家門



④

昨日之為以報以子我待其意以委細之其再報  
改其具也

一 天狗石有兩峯第一峯自山一峯由石有之附  
峯之連也其記也其子給量台法我面以摩之先  
頃阿使王使國境中筋法記也下以生孫孫各示  
御記と下以故也方地下人其方合也法与指也  
之七中由也之先也城也記也天狗石等以記也其孫孫也

方より方之由書附其城也其量也其孫孫也其先

一 其分法也又也其子其孫也其孫也其孫也其孫也  
得形也其定也其孫也其孫也其孫也其孫也其孫也  
其通也其孫也其孫也其孫也其孫也其孫也其孫也  
出也其孫也其孫也其孫也其孫也其孫也其孫也  
水原也其孫也其孫也其孫也其孫也其孫也其孫也  
外也其孫也其孫也其孫也其孫也其孫也其孫也  
一 其相親也其孫也其孫也其孫也其孫也其孫也其孫也



一海邊山邊御境目之御國之要村者國に中浦境之  
 以座之是心之是心我者心毎度中浦史之是心  
 而方之少敵者山望之是心方地下人者心毎の庵之是心  
 御境目之少敵者不中身之是心又國境之是心  
 儀法双方之是心宣法及人中換馬之是心相叶之是心  
 存心

一新吾家換馬長廣治在後中今十五名各名燈之儀

御境相知之換記ゆり可然換之是心  
御境相知之換記ゆり可然換之是心

新吾家換馬信心ゆり境目分明中集京之是心

公義御務急之國境不相知之是心  
公義御務急之國境不相知之是心

殊峯第廿夕通又之是心少敵者心者之是心

國境不相知之是心仕義可直取之是心何分國之是心

以後及法相法之是心御役人中換馬御之是心

御務急法平之是心可義心問之是心侍可之是心

一竹島國領者之物在地在道に在所之是心



書附錄師目如相應、思存重上、而及、後、知、造、方、  
係、是、裁、中、一、強、兵、相、副、下、進、皆、指、城、以、物、以、下、伴、其、  
意、之、多、也、中、一、強、兵、者、持、道、道、也、

一、牛、石、分、西、分、は、境、目、各、を、修、為、之、の、一、國、之、分、中、來、何、分、中、  
御、車、之、其、記、可、中、と、在、存、其、方、不、可、以、言、存、入、成、之、物、  
石、志、多、の、尾、邊、し、り、御、役、之、中、檢、兵、兵、中、檢、兵、之、相、考、  
在、地、形、之、遠、近、可、言、之、と、之、の、峰、通、之、難、記、也、其、之、裁、重、也、  
可、及、其、個、法、と、牛、石、每、夜、不、任、何、也、其、之、忠、惠、也、其、境、目、  
不、相、知、し、御、車、之、記、重、之、後、其、原、儀、決、然、也、其、之、檢、兵、  
所、有、也、其、之、檢、兵、之、方、は、同、意、之、儀、也、其、之、檢、兵、之、方、  
思、之、之、所、及、之、之、道、之、之、檢、兵、之、意、也、其、之、檢、兵、  
上、上

六月十八日

森林院丸

高田興

村上監

(子)

下御再



去之換御窺預赤御居上以味之由之御國許の之  
所居右有之御境目之使是也委細定之相知可也  
生上之より可也此意相交儀年所座の可不能多事  
修之儀少趣之入内急儀之由望也且又裁也御増着  
有持之下請取之由之上

六月十九日

追々昨日御下繪系御用是之可也又之由之

御下居上御持者我御於所少在御事仍志持

御用是之由未御居上之由成之哉也

方之由下豫系持者之由在御之由核

之由核子之由言之由具之由轉之由可

之由上

本林源左衛門

村上豊次

若目典







四

之後ハ絶書音御物意、午存ハ残暑甚發は望の所ハ  
海名は別儀は勅可成物事奉存ハ

一兼多得法意ハ通、其は國當國境目名不覺は其方  
地人共ニテ而奉通國境ハ記分明不ハ誠知有ハ付  
程又急ハ入存、其は所ハ所ハ所ハ抑到來付地下今  
中城ハ執之宜初ハハ城ハ通ハ天狗存、多ハ奉通ハ難玉  
初ハ并甲浦宜浪道ハ東海際ハハ山境ハ奉通

大峯筋見通ハ阿波御國ハ方ハ其ハ石有ハハ城ハ

百歩方ハ儀ハ先ハ附札ハ記懸御目ハ通ハ書記ハ度ハ

且又海際上境阿波ハ名知ハ其ハ之ハ尾ハ御書附有ハハ

得共當國ハ地下ハ其ハ志ハ之ハ尾ハ知常ハ不存ハ取均ハ

分明ハ其ハ望ハハ其ハ甲浦道口直ハ大峯ハハ筋通ハ其ハ

其ハ海際ハハハハ其ハ峯筋ハ其ハ望ハハ其ハ峯通國境ハ

難極処ハ其ハ所望ハ其ハ地形ハ入遠ハ其ハ其ハ其ハ其ハ

右ハ其ハ其ハ其ハ其ハ其ハ其ハ其ハ其ハ其ハ其ハ其ハ



何分海島地多中合其庵宜相記中物之并城山右分  
得法意之通坊而相造之其地座山得此諸者之  
面無過之公的之幸通國境之難之其地并右分  
之物石之海際止之道可之幸通國境之記之有  
之國境不相知之其地幸有

一葉多之平石之西分之河境目幸通之難法而有之  
中城山右分海島地多中合其庵宜相記中物之并城山右分  
得法意之通坊而相造之其地座山得此諸者之  
面無過之公的之幸通國境之難之其地并右分  
之物石之海際止之道可之幸通國境之記之有  
之國境不相知之其地幸有







東海際迫了山境之峯通國境之形以難分  
 先達之古城也通天物名之者有大峯筋是通  
 阿州之方其石有之山嶽中其下比知之家先也  
 御附札所記也其通御所書記也其是也其海  
 際山境阿名各名所志之山嶽善附有之得是  
 之御國之地人志多之屋之中亦常之有故其  
 分明也其望之其上甲浦言通之大峯之助通也  
 得是海際也其下之山嶽多也其形也其難分  
 通國境之難分也其望之右地形入遠也其難分  
 之得是右之記付一也其峯通國境之御極難分也  
 然其何分御當地也其合其能記也其也其也  
 右分其也其通也其相遠也其也其也其也  
 繪為之面此也其也其也其也其也其也其也  
 其名也其天物也其海際也其也其也其也其也  
 境之御記其也其也其也其也其也其也其也  
 一第多之牛石之西分也其境日峯通也其難分也其也







河吟味相痛下可也乃具昂山互于塔相極可  
修之通名亦多指交可中根可居聖山乃右極山乃  
可也下之委曲世之海乃可得所意也且上

辰  
七月二日

松之身元極乃若山御塔繪山在下下五  
中の得之唯今之何也雖本儀所度乃下  
修乃乃乃中其乃儀自是可有是也山也

青繪出事の間に右雲附の雲小の學舎支の  
不其成儀所度湖右極山心得可有也山上

森源左衛門松

村上監次右衛門

首目監次右衛門松

①

先之之後之通話の中乃乃乃暑桑乃碑以是所聖  
儀所初乃乃乃之極重乃乃乃此之先乃得也意也通也  
國清路亦近玉来乃乃依之華乃及所相話乃乃乃之  
宮喰由乃乃乃浦境名不覺之儀也之松御下孫者乃乃



是後此以相簿中由氣及此内得也意也然了極成  
其以之此方錄系書記無異同也存之程亦函致存  
存以若又其是程不思存之新所書記其也此以宋  
不存之由中合抄の中なる存の世も一可也思存存  
以得其在右中上以通此方書記附指問在申子中意也  
以係意の上

七月十日

本林源左衛門  
春日無任大恐

寸上書及存致の旨

子

先刻之御切紙及封是の如信此間之諸言は在成の残者  
御所聖意の御勅取重奉存然先の成は存中の通  
之御國清沙繪並進口出未中依之筆は後相造の成  
之御玉甲浦境常玉宮喰各不脱之儀此方繪  
為御内見成以相簿中由御聞及之成方御内之信也  
通相極の之生之極御縁為御書元見き可成の存者  
程の御聞之成及思存の若又此方存者之趣書記進  
之御内見成以相簿中由御聞及之成方御内之信也



存以得其在信下通之之板以書附指交以付其以遠  
 高其信守以信右每改其知以信之存以思君其意  
 可其信以其上之其以中即相許仕書附其之上

七月十日

猶是別之署案痛字互外平部之再在  
 先以之指之信之信之思君其意之書附先  
 之或以見之可其以信之之信之信之信之

本林源九德門松

村上善右衛門

普同修設不德松

○ 仰手成民我其山如信其後所物遠中送下信信其意  
 物重壽存以然其許松以信其意之信其意之信  
 信之之重信其信其信其信其信其信其信其信其信  
 所出由信其信其信其信其信其信其信其信其信其信  
 其信其信其信其信其信其信其信其信其信其信其信



七月十日

本林源在鹿門

言曰與源處

正學堂書

○ 此夕之辰返觀持也 亦改好是沛以別系于所歷以致

實事存 然其具居國當是境目各不登此方存象之

趙錄為記先為反目其上下也石之程可存也

付別附札之記

一天物石名不詳記也成也 綠為附札記通和記可

中々存也又かか峯名東山集道 國境不相和也

被成一天物石石形近記也其書及道中名近也其書

一甲浦海際山境儀此方地人其地中其地也

筋の海際とあり其地所至當至之角山少欲將有

舟峯通と雖中其地也何分内得也意也通也境

不相和也其地記也其地也其地也其地也

遂何云所和記也其地也其地也其地也



口其出は松島と諸山未だ其處有可住剛其御心得可也

七月十日

右林源左衛門

本物圖... 首目無誤

村上豊右衛門

②

此類御切紙持見は御心等より由取重存此は

當國境目名和燈急各松思居易く因法孫為先御記

御心... 別下御出札之成

一 天物名各御記出は御孫孫御出地通御書附

可く成多又かき山峯分東山皇北通國境不御知仕

いり天物石く石飛通御記通断書不及各所通

御書御記可く文由

一 甲浦海陸山境候生御取地人其申より進

大奉一勅分海陸... 内山少取

物了者之付奉通と難中申す所何分内







問多劫と存、様は毎朝、可成下上

七月十日<sup>辰</sup>

様は遠方へ内方へ、遠方へ内方へ、  
了成記に成候、進上り申上り候、  
御是を名分函書付返、様へ通候、  
以相侍仕、度宜相調、存候、上

森 源左衛門様

村上監右衛門

○

別紙、御返答、可成意と存、知、物、良信

其、中、様、候、御、意、也、川、は、り、下、り、相、侍、申、上、候、事、  
等、々、様、候、御、意、也、仕、合、候、事、候、事、候、事、  
以、附、真、不、申、上、り、上

七月十日<sup>辰</sup>

村上監右衛門

森 源左衛門様

村上監右衛門



(2)

一 明皇御返轍令朝為持進して御書通知と由

一 海際山鼻志との庵と中不和と右不和志之松地下人の

少存の其之松地下人中唱りて彼不境日名不口次と

中口維令口頭と名初と御記のそ茂世口頭河皮因

そそそとの庵と中不和と御書記不之成り得しと成中

然と右と左より通志との庵と中不和と之之松地下人

不存の其之松地下人初所記出のそ之御境日名所

記の得生との松地下人初所記出のそ之御境日名所

不成就と兼る御役人中初所記出のそ之御境日名所

各所法寺の記不及甲浦峰不東海際山鼻志との庵と

境不相知と御書記出のそ之御境日名所

必遂知と右口頭此方志との庵と中不和と之之松地下人

少得ると同書記出のそ之御境日名所

口頭河皮との庵と中不和と御書記出のそ之御境日名所

神の島城口道と書附と同出と儀と存の松地下人の

山鼻志記宮嶺端と書附と其の東口頭道と問後







①

一此方之方以返較以和紙特是并此方之縁名在也  
附札絶及所詮令以知多矣因所釋之立之松也右  
所行或之由下之及是知以右所返較以可為也思右  
以知所理良候と系所傳入有之个朝近道以と由  
入心多由是事也

一此方之白紙付れ之通大社所傳之也思之通同也  
所記可之由得之也思之

一此方之白紙付れ之通大社所傳之也思之通同也  
是又得之也思之

一此方之白紙付れ之通大社所傳之也思之通同也  
白紙附れ之記得之也思之海邊正鼻近道仕也思之  
思之殊之也所因所希之也程近有之境同也思之  
儀之也思之也所因所希之也程近有之境同也思之  
記甲備時之也思之也程近有之境同也思之  
此方地下人思之也程近有之境同也思之  
此方地下人中思之也程近有之境同也思之



頭と名を記すは以て阿波一國を志すの地なり  
書他の中を得る不概不恒に在り且通志の序に  
志すは方地人あり中にも在る名不冠記あり上  
所境目名不記あり生得なり善なり善なり善なり  
不中なりふふ如題す善なり信なり信なり信なり  
右に不なり何なり名なり不記なり及中浦時東海際  
山を異道國境と相知し以て不記なり或は安んずる  
の地なりなり御書清なり御及なり御及なり  
御書と海及及潮なり御同意なり

一先に進くは常國縁を并裁也其共抄校所處は下  
請多し右に御返報善名不記論文を相和可  
色々相調り起す之校名不冠記相和可  
在り官事細と信調可なり

七月十日

森源左衛門  
春日興徳

村上豊次右衛門校



(子)

所切致必取之也然其涉境目各和覽之傳先日西院修之紙  
 其致は附れよ格は記方は相法所見よ宗子白紙御附札を  
 御同意有方中述く小生内中酒崎方東山葉海際迄く  
 湖園境不相知と伝書附し候存存存と執得は意家  
 当又所方思存身く名も存らり付御再致一紙中述く  
 然よ志多の所と中格ありと之格取人あり存中成り下  
 少致取し内は志方の所掌と述く此方中より取東山葉  
 と山程とあり傳はしと意ありと述く今も相傳はしと存  
 思方と白生多は同意有方

一昨日傳述書は通く之は縁分御記と如尋取文以て決  
 るも可致可く如く息存所書述所取新書傳松伝完は因哉  
 各不覺所中合原若め此所記く如式志方且上宗圖  
 一越をも此後之の処所縁分西記と述文伝空則清山縁分  
 上存御書記可然く勿倫傳而多の事と附存本西記と及  
 四境不相知とて成義ありと每葉多程本山縁分存也西院小  
 則御縁分と名不覺并御伝文西書附御判紙は如く成







甲浦崎の東山鼻海傍に一間を設け石相知書附あり

一 類に似たり左に於て此方有意と通得べき意を得る可

し伊丹部之志多の尾當此地中人

口頭と各所に出るに甲浦崎の右志の尾口頭近し

四境不相合と書附りて道は同路を可也程に思召し

然るもわく此方供造各所多命記海邊より東

山鼻と西と相極む方程多書附記あり相か進

地下人多存あり城り上下り少敵射り内りつて志

多の尾岸通と程中多あり中多あり任所成と東海傍山

鼻進と相極りる各所人多相際出たるなり

一 此方御書面拜見し仰別及所相法通此方程多相

記し清御給命記候法座り左文路に候る可

相窺と存存候方近所世新舊枚出候り

相窺と存存候方近所世新舊枚出候り

相窺と存存候方近所世新舊枚出候り



右不懸一人合底者其姓可書記或立之許抄所抄而之  
之し中し之如録系之記通文以之其間所清繪系其  
書記可任之向論坊抄之明之留名之記出不及出  
不知知之其如或皆之修業其核之抄之由之  
則録系各如懸并證文書附到形之相如裁也  
一不之底進之其間其之抄所級為之友之類之准  
御調之如之り正有之右之通新之信抄之成之之無

七月十四日

森源丸徳門

寺岡豊以右徳門

村上豊次右徳門

②

昨日之所抄家多細及所較之然其方場繪所中法通各  
書附則證文之相如改進之其間所抄中法相降其重有  
其又所抄所證文書七月之通之御中附世以理之官證所係  
抄之之者之何哉其附法之付仕進之其之之核之



四附与如母黄山返の事下界昨夕、行路持進上付

七月十五日

初之折方裁迫了給系、儀受月十二日塔給一不  
此進事名、是系、所授給系、  
以後先為付、再方、  
送進の上

本所源左衛門

村上豊右衛門

方白豊右衛門

④

所手致、後折是、如何、  
方、  
持、  
所、  
四附世、



所出相原之序法亦可明也第道法繪系是也  
軸上相原少極之其存心之如也而以上

七月十日

從之也之極之也一河海系之也法我上先原之

此方何置也其又亦庶之也境繪系之也

其用之也如之也其猶度一可也也先原

中進其法法進進請取之也上

在河原左衛門

(1)

此之其河原河海系之也始未早速行調系之也清繪系之也

書記此其也存其之極長以之務除中其也相調

由之河原河海系之也其可有也其也其也其也

河繪系之也其繪系之也其繪系之也其繪系之也

道繪系之也其繪系之也其繪系之也其繪系之也

河繪系之也其繪系之也其繪系之也其繪系之也

白繪系之也其繪系之也其繪系之也其繪系之也

之繪系之也其繪系之也其繪系之也其繪系之也







思后所存之意不修不立以法役人秋以指前台各不整以牙  
前後相記以之其元格進以指給不調也之及以  
先以一通字令能障于家可居之由也後下通函知  
仕以證所境為始以所之巡守之候達下以關係相親法  
繪畫附可下自心付以候少修別下之亦存存之上

辰  
七月十日

於每方書附了身何分可修也之先各進

此書附了身何分可修也之先各進

返進修先置之以修場給不竹在若之河彼

圓修教村之何程之法書附以河彼國而書者

最之相是也以外之準下候去之亦進不

以得之亦下進不亦亦其致生在在

本林源左邊松

村上豐江右衛門

若同無修在馬心松











書記不及大概東山島とは多可坐積在存及山相從  
山日意より相記の中にもは是方清繪系新書附相極  
一儀の圖可成りし中かき生通り成りしもの若又何  
分よ長活思つてお不應つて中浦崎の東南山島海際  
迄の山あり書直してしるる所は海のこは海と名なり是  
所方へ進み是れ標高の成りし所は標高なり不返進の  
は方山直つては右へ通東南の山ありしを東と

土の山ありしを東と名なりし所は標高なり不返進の  
は方山直つては右へ通東南の山ありしを東と  
山ありしを東と名なりし所は標高なり不返進の  
は方山直つては右へ通東南の山ありしを東と

七月廿日

森源光樹

首目無次書

村上無次書

②

山ありしを東と名なりし所は標高なり不返進の  
は方山直つては右へ通東南の山ありしを東と



山書附... 此方... 直可進... 書附... 方... 別... 今... 附... 讀

七月廿二日

村上興次右馬

森原九徳

菅田興

①

山... 谷... 東... 意... 別... 改



進中其元松河場給與改進在州生通河及在城去  
以越可其元松河場給與改進在州生通河及在城去  
心之面之得之意以上

七月廿三日

森源左衛門

首目與次處

村上與次處

(子)

正山再報改行是也松河場給與改進在州生通河及在城去

東之了字の東有と書直下と心右度多意、多字の凡  
所場繪不改進進如早速以改爲持字、松河場給與改進

松河場給與改進進如早速以改爲持字、松河場給與改進

中台院承命其通書附返進任以所之爲軍得法

意以變早速以所之爲軍得法

七月廿三日

村上與次處

本以源左衛門

首目與次處



子

切我之心得此意也。之後所相違つ好道は海法皇志御勅  
可くも臨幸有る。然るに生之程は猶明く一日或日  
以て其の上の御心程は海法皇志御勅に相違  
修為の御心程は海法皇志御勅に相違  
且其の御心程は海法皇志御勅に相違  
不し其の上の御心程は海法皇志御勅に相違  
其の御心程は海法皇志御勅に相違  
其の御心程は海法皇志御勅に相違

八月十日  
村上監河右馬

森源右衛門

着目共所右馬

子

此の御心程は海法皇志御勅に相違  
其の御心程は海法皇志御勅に相違  
其の御心程は海法皇志御勅に相違  
其の御心程は海法皇志御勅に相違  
其の御心程は海法皇志御勅に相違  
其の御心程は海法皇志御勅に相違  
其の御心程は海法皇志御勅に相違  
其の御心程は海法皇志御勅に相違  
其の御心程は海法皇志御勅に相違  
其の御心程は海法皇志御勅に相違







表原左衛門尉

言田與遠右衛門尉

望豐右衛門

① 山子我志取相見り此後是後法物系之由不承法聖遠

此後是後法物系之由不承法聖遠

此後是後法物系之由不承法聖遠

此後是後法物系之由不承法聖遠

此後是後法物系之由不承法聖遠

此後是後法物系之由不承法聖遠

此後是後法物系之由不承法聖遠

此後是後法物系之由不承法聖遠

此後是後法物系之由不承法聖遠

八月廿六日

此後是後法物系之由不承法聖遠

此後是後法物系之由不承法聖遠



之師而若若所視但用子以禮

可進之言思名譽之存存也

村正無名處核

本以源九條門

首同無名處

甲浦定儀境論從双方見坐文通部

貸入  
四

一 于甲浦所上出古以各程所生律定法可也  
珍重存小抽者先出如之其廿年所也

一 於度國經系規以片上以生何國之當國境之

之海所好方法諸品也記中不仕河波在核當國之

強中不究其條也律也其以不極也之其也其書什也

仕生生所上納也原中第法律也依之生何國甲浦

出中回安作浦據境之儀也其生所生也中通也



通先年分より給ひきこるへ候 丈へは候仕地方之  
以後將台より志村の尾より山を下りて近先年分候迄  
之右より浦へ採集仕候様ハ桐大嶺右候  
切に仕申候様分より給ひ候候へ候仕候 丈へは候  
中上より勿論より給ひ中央より右に下り候仕通地方へ  
境近向候仕候候候候 丈へは候仕候 丈へは候仕候  
并来より若者迄之件より給ひ候仕候候候候 丈へは候  
可し申し申候仕候候候候 丈へは候仕候 丈へは候仕候  
江戸より申候仕候候候候 丈へは候仕候 丈へは候仕候

一右急候仕候仕候仕候仕候仕候仕候仕候仕候仕候仕候  
各候仕候仕候仕候仕候仕候仕候仕候仕候仕候仕候  
田所より給ひ候仕候仕候仕候仕候仕候仕候仕候仕候仕候  
所より給ひ候仕候仕候仕候仕候仕候仕候仕候仕候仕候  
者より給ひ候仕候仕候仕候仕候仕候仕候仕候仕候仕候  
候仕候仕候仕候仕候仕候仕候仕候仕候仕候仕候仕候  
候仕候仕候仕候仕候仕候仕候仕候仕候仕候仕候仕候  
候仕候仕候仕候仕候仕候仕候仕候仕候仕候仕候仕候



以爲め新法度之由程禮云

元禄十四  
九月朔日

村上忠右衛門

安房守平兵衛

本町源左衛門

若岡左衛門

此等之儀右衛門等之儀後之儀是也

甘奉之儀右衛門等之儀是也

乃何侍者之儀是也

川邊之儀是也

袋入

九月八日

① 寺之新法度之儀是也

分給之儀是也

一其由向南園後角之儀是也

折之儀是也

分給之儀是也















東源古海松  
善月あま海松

受

袋入  
①

五

一 宗信を臣新道を志すの厚くありては如後之宗  
信を事

一 宗信の始と終とを知る何れも其細くは能くさへ下せ  
りて此合する名可仕都は度

石は観るべし心止

己未月吉

島崎可吉史

袋入  
①

六

一 宗信を臣新道を志すの厚くありては如後之宗  
信を事  
中より先は後國の事極は方は信進る事也

一 宗信の始と終とを知る何れも其細くは能くさへ下せ  
りて此合する名可仕都は度



り十号。

本林源吉造

若目之右造

小村長助

安藤徳造

堀部吉吉次

徳子江作造

算

袋入  
①

一、空、管、早、浦、地、方、海、堤、目、何、石、分、志、札、の、度、中、持、知、此、方、

堤、田、段、同、地、古、由、海、堤、年、前、由、通、河、石、分、

石、分、未、係、移、地、向、下、一、石、分、海、堤、と、お、担、交、

申、出、り、田、段、之、石、分、未、係、通、堤、お、担、交、

係、申、出、り、海、堤、之、石、分、

本林源吉造

若目之右造

十月廿六日











付入

①+

竅中過即書也... 此書乃... 出合中... 并... 以村... 此... 前... 度... 何... 相

此乃... 土月... 高... 可... 也...

也...

表源老... 為...

急...

一... 何... 人... 中... 尚... 亦...

系... 招... 亦... 山... 下... 留... 信... 都... 上... 五... 七... 之... 自... 抄... 的...

① 付入

上



中世の事は在世人請山祈禱係入と承中世は  
又至老志中極老儀との岩山祈禱係出知迄  
一此等在野下代氣乃生法事より官より中世の事  
衣与法也亦老運中極老儀中世の事より中世の事  
初也此の事は在野下代氣乃生法事より官より中世の事

一 宗室諸君は河陽に在り依りて之後諸公に在りて中世の事  
外司に在りて中世の事に依りて中世の事に依りて中世の事

出會何角戸禮書事侍長に於て下代門下事及善長諸君  
滋養自來由流諸君係子事重陽諸君事世世由  
以後承統に上各分好く中世の事に依りて中世の事  
事一之が為めに在りて中世の事に依りて中世の事  
其心は在りて中世の事に依りて中世の事に依りて中世の事

一 此の事は在野下代氣乃生法事より官より中世の事  
中世の事は在野下代氣乃生法事より官より中世の事  
是れ亦亦後世の事に依りて中世の事に依りて中世の事



青<sup>己</sup>月<sup>己</sup>也

家<sup>己</sup>海<sup>己</sup>可<sup>己</sup>也<sup>己</sup>

杏<sup>己</sup>源<sup>己</sup>古<sup>己</sup>樹<sup>己</sup>松<sup>己</sup>

祀<sup>己</sup>作<sup>己</sup>松<sup>己</sup>松<sup>己</sup>

塘<sup>己</sup>古<sup>己</sup>古<sup>己</sup>松<sup>己</sup>

著<sup>己</sup>古<sup>己</sup>松<sup>己</sup>松<sup>己</sup>

水<sup>己</sup>古<sup>己</sup>松<sup>己</sup>松<sup>己</sup>

安<sup>己</sup>古<sup>己</sup>松<sup>己</sup>松<sup>己</sup>

十二

家入

山

村<sup>己</sup>送<sup>己</sup>古<sup>己</sup>松<sup>己</sup>松<sup>己</sup>

一<sup>己</sup>字<sup>己</sup>原<sup>己</sup>浦<sup>己</sup>庄<sup>己</sup>屋<sup>己</sup>川<sup>己</sup>松<sup>己</sup>庄<sup>己</sup>八<sup>己</sup>等<sup>己</sup>古<sup>己</sup>亦<sup>己</sup>古<sup>己</sup>松<sup>己</sup>松<sup>己</sup>

以<sup>己</sup>古<sup>己</sup>松<sup>己</sup>松<sup>己</sup>古<sup>己</sup>松<sup>己</sup>松<sup>己</sup>古<sup>己</sup>松<sup>己</sup>松<sup>己</sup>古<sup>己</sup>松<sup>己</sup>松<sup>己</sup>

一<sup>己</sup>古<sup>己</sup>松<sup>己</sup>松<sup>己</sup>古<sup>己</sup>松<sup>己</sup>松<sup>己</sup>古<sup>己</sup>松<sup>己</sup>松<sup>己</sup>古<sup>己</sup>松<sup>己</sup>松<sup>己</sup>

追<sup>己</sup>古<sup>己</sup>松<sup>己</sup>松<sup>己</sup>古<sup>己</sup>松<sup>己</sup>松<sup>己</sup>古<sup>己</sup>松<sup>己</sup>松<sup>己</sup>古<sup>己</sup>松<sup>己</sup>松<sup>己</sup>

今<sup>己</sup>古<sup>己</sup>松<sup>己</sup>松<sup>己</sup>古<sup>己</sup>松<sup>己</sup>松<sup>己</sup>古<sup>己</sup>松<sup>己</sup>松<sup>己</sup>古<sup>己</sup>松<sup>己</sup>松<sup>己</sup>



一傳無情而之在凡之生情無情而之在凡之生情  
 中凡無情而之在凡之生情無情而之在凡之生情  
 一宮信之在凡之生情無情而之在凡之生情  
 寫以通都各回之生情無情而之在凡之生情  
 過之可之生情無情而之在凡之生情

十月廿九日

此後平在更  
 古利

本東源左衛門格  
 著 与江右格  
 祖 作花格  
 坊 古古更格  
 北 長助格  
 女 依多格

卷之十二

其後之生情無情而之在凡之生情無情而之在凡之生情











高崎系を主たる

古杉系を主たる

此の古杉系を主たる

高崎系を主たる

古杉系を主たる

高崎系を主たる

古杉系を主たる

高崎系を主たる

古杉系を主たる

高崎系を主たる

古杉系を主たる

高崎系を主たる

十月廿九日

高崎系を主たる

古杉系を主たる

川端系を主たる

田井信業系を主たる



南路志續篇稿草卷卅志

史誌編輯係集

目錄

土阿内論記六

天和元酉年上





二番  
土阿内論記



目録

土阿内論第六  
天味大西平土

南強志録解題草卷廿五

史書解題



阿内論記

目錄

一 甲浦大境之史

一 土阿内論記之部

天和元年

一 二子島之有之拈松取扱之史

一 二子島之儀之付双方出合中談之史

三 貞享元年

一 阿内淺川浦太郎右衛門鮎漢取扱之部

一 宗復在屋老古子甲浦在屋老古應對編



書之支

一字喰甲浦鮎儀之儀附詮義覺書之支

一甲浦字喰渙場壹卷

一阿洲江戸屋傳老樹門与甲浦八右樹門取遣文通

右支跡内詮儀之支

一阿洲字喰庄屋老与甲浦庄屋年寄占

一白井與助少不破甚右樹門仙石源治郎  
達方之支

四貞享二丑年

一甲浦庄屋老書附之内入用之廻書按之支

五

一甲浦渙場之儀附達 御聽覚書之支

元禄四丑年

六

一野根甲浦阿只字喰鞆浦中合并甲浦阿洲

竹ヶ島金目破損紙之節浦手形出中合證

文之支



元禄  
七

一二子島之吏

其

一安在浦在右郎船破損取扱之吏

其

一在屋平右史指上ル口上書之吏

八元禄十三年

一甲浦二子島之吏附江戸御田七通連之書状書扱之吏

其

一甲浦御境目筋二子島等所州示該扱西野

惣右衛門之御奉召申上御連之吏

其

善越賞書之吏

三

一二子島之儀森源左衛門首目此次右衛門

其後没掛之面之御奉召申上書之吏

四

一西野惣右衛門首目之次右衛門之濠路守掾

御辱浦之正保之古繪圖持来引合之吏

五

一安在浦在右郎船破損竹之島二子島大物

荷物有之浦手申合之吏



六  
一三子島色分漢業之義、村森源左衛門

首目其次右衛門、西野惣右衛門、文通之妻

七  
一三子島之儀、附西野惣右衛門、御奉行中、日

違出之妻

八  
一三子島色分古繪巻之振合漢業障之有在

等委細西野惣右衛門、御奉行中、日

一三子島之儀、先年上御奉行右衛門前野

金吾勘兵衛三、又、阿比郷司孫右衛門里村

新助五會之節詮儀振等有之阿比、日

引合方之儀、西野惣右衛門、森源左衛門

首目其次右衛門、氏山彌五右衛門、堀部七右衛門

前野權八右衛門、合之妻

十  
一三子島繪巻之儀、日、公忠、日、何書委細違



御聽阿州占引合之儀西野惣右衛門より

御奉<sup>十一</sup><sub>中</sub>占達之<sup>十一</sup>支

一二子島之儀<sup>十一</sup>阿<sup>十一</sup>占引合之口占書取扱

委細御奉<sup>十二</sup>中占西野惣右衛門占達之<sup>十二</sup>支

一阿州片山故右衛門占相渡<sup>十二</sup>免書之<sup>十二</sup>支

一二子島<sup>十三</sup>漢業前之通<sup>十三</sup>中合相細右波是

御奉<sup>十三</sup>中占達之<sup>十三</sup>支

通達之<sup>十四</sup>支

一右向新之儀<sup>十四</sup>附<sup>十四</sup>同人之御奉<sup>十四</sup>中占達之<sup>十四</sup>支

一二子島之儀<sup>十五</sup>附<sup>十五</sup>漢業掛在<sup>十五</sup>免之儀西野惣右衛門

御奉<sup>十六</sup>中占達之<sup>十六</sup>支

一二子島之儀<sup>十六</sup>附<sup>十六</sup>阿<sup>十六</sup>占御留守居片山故右衛門

取<sup>十六</sup>免書之<sup>十六</sup>支<sup>十六</sup>同<sup>十六</sup>人手紙之<sup>十六</sup>支



十七  
一在島双方中合相滞首右之附阿州後入也

引合之事共表源右衛門首自監治右衛門

氏山彌五右衛門城部七右史前雖權八也

西野惣右衛門合之史

十八  
一子治之儀身阿州村之監治右衛門表源右衛門

首自監治右衛門合之史

十九  
一子島ヒサコ波右衛門合之史掛合之史

二十  
一源右衛門監治右衛門合阿州ヒサコ波右

一源右衛門合之史

二十一  
一阿州村上監治右衛門合右方之史

九元禄十四己年  
一御境目察書之部

十同十六未年  
一竹ヶ島漢業取遣之部

一阿州流治右衛門合西野惣右衛門合持系以上



書之支

一右同入分漢業之儀附西野物心右街門上於波

賞書之支

一竹ヶ島邊漢業之儀附御奉事江中

御仕置中分西野惣右街門上水通連紙面

之支

相渡賞書之支

一澁張於右街門上同形之儀附西野物心右街門上

相渡賞書之支

一西野惣右街門上漢業之儀附御奉事江中

御仕置中分文通之支

十一

一甲浦御境目掛之支



甲浦大境之度

天正十七年己丑二月廿六日

一阿州宇喰ト土品甲浦トノ國境東ハ甲浦トウケ限

一南ハ海ヲタコ島甲浦烏帽子キヤウクナヲ限北ハ石ノヤスハ

ノ峯天狗石ヲ限

一西野根トノ境ハ生見トウケ峯ヲ限

以上



一 西暦一千八百九十一年

一 西暦一千八百九十二年

一 西暦一千八百九十三年

一 西暦一千八百九十四年

一 西暦一千八百九十五年

土阿内論記

二子島有之 枯松取扱之 支

一 二子島之 大松有之 七年枯有之 延宝九年酉七月

大之 風吹倒之 因八月七日 攝師頭次郎兵衛

日家之 系知吾年 若若松儀 右衛門 告東浦浦

以役人 田村八郎左衛門 并明神彦 右衛門 及片 首語相違

弟左史 存命不定之 痛申 何所 何所 諸之 此地 下人 志

中附甲 浦片 及山 中 中 終之 阿州 領之 中 連 浪 平 次 舟 害 復



可取上誦書此紙抄出然能打是因十百安藝治在街の左  
別列の指裁因十言水端右の要細抄則於水坪下  
水披露の交案從甲浦之不及強進上の義言吉松  
後右街の書附治在街の及水津取右の書來下地中人  
新の仕様と座巻連案中附の抄と治在街の及水内意  
為地中人共ととと世割細大抄の仕事

一 同八月廿二日竹々高島人松尾久右衛門惣田九右衛門方

高島大藏の御筆の御書に  
儀在街の裁判の甲浦の取の義言合点の案の返事の中紙

得る文の有使九郎右衛門牙市並上中者之案書

一 右即刻案書文以上之返事二子高阿呂水鏡の由事  
哉何吾難心得從先親甲浦の言の惣と上代能此  
迫道高小枯木風折有の時我等在りるを心  
地中人共為案來身右の松尾因前中附の案の存  
案文通の預り合点の案の返れを不可中案の在亦使  
見分る通大高の記御其儀口上之在連中使物之受



一在因白直諸有度と名物心田丸右邊の筆書と又定宅裁

九右邊の中ハ今朝以上と返多使而調法者強中分

依了相役久右邊の相諺と上直筆強中彼松之根有

之相共境自之相故あさし取旨我若恨多直筆

七月廿二風吹倒中附可也と存相若友人斗と直筆

強中之邊押後中地甲浦片直筆取若其強中若押

中若の中相若若強使有之殊強海之船も存し強

一重右邊の筆書と儀様所代の強強強の儀合と直筆

我書或直筆筆強中身金中より己と直筆と直筆若好中

何分二子高直從先強甲浦分存右之強直之強と直筆ハ

九右邊の中相ハ使無調法直筆右相之直筆中中直筆

相打役之儀可分中物直

又想由九右邊の中自七五日申刻之強裁若其若直筆

福重之強口中直痛若強強若直若松儀右邊

出合中直



一 九右衛門中松以前平右文之君に得て字高を甲浦公  
松を地下又之跡を取と有し久右衛門中松強合化  
西之儀漸折々年以來行々高之君に殊迫致す又之  
父之能妻と云存り侮親共存命之内中松高之字高何  
足能<sup>り</sup>前<sup>り</sup>之<sup>り</sup>書又中傳<sup>り</sup>由<sup>り</sup>自今阿<sup>り</sup>足<sup>り</sup>存  
是<sup>り</sup>得<sup>り</sup>中松高

一 儀右衛門返其思急<sup>り</sup>返<sup>り</sup>之<sup>り</sup>言<sup>り</sup>出<sup>り</sup>平右文<sup>り</sup>中<sup>り</sup>通<sup>り</sup>

一九右衛門中其通<sup>り</sup>其<sup>り</sup>外<sup>り</sup>之<sup>り</sup>言<sup>り</sup>得<sup>り</sup>無<sup>り</sup>事<sup>り</sup>

久右衛門お禮多<sup>り</sup>断<sup>り</sup>之<sup>り</sup>事<sup>り</sup>多<sup>り</sup>近<sup>り</sup>不<sup>り</sup>保<sup>り</sup>久右衛門と<sup>り</sup>得<sup>り</sup>合<sup>り</sup>之<sup>り</sup>  
空<sup>り</sup>言<sup>り</sup>存<sup>り</sup>存<sup>り</sup>物<sup>り</sup>心<sup>り</sup>高<sup>り</sup>古<sup>り</sup>者<sup>り</sup>之<sup>り</sup>志<sup>り</sup>之<sup>り</sup>中<sup>り</sup>條<sup>り</sup>彼<sup>り</sup>号<sup>り</sup>之<sup>り</sup>年<sup>り</sup>可<sup>り</sup>中<sup>り</sup>中<sup>り</sup>  
と云物<sup>り</sup>高

右平右文儀右衛門返其<sup>り</sup>事<sup>り</sup>田<sup>り</sup>村<sup>り</sup>八<sup>り</sup>郎<sup>り</sup>右<sup>り</sup>衛<sup>り</sup>門<sup>り</sup>内<sup>り</sup>郎<sup>り</sup>彦<sup>り</sup>  
右衛門不<sup>り</sup>残<sup>り</sup>得<sup>り</sup>内<sup>り</sup>志<sup>り</sup>大<sup>り</sup>抵<sup>り</sup>之<sup>り</sup>お<sup>り</sup>誤<sup>り</sup>之<sup>り</sup>是<sup>り</sup>

氏布三女と八郎右衛門と相<sup>り</sup>役<sup>り</sup>之<sup>り</sup>由<sup>り</sup>其<sup>り</sup>下<sup>り</sup>之<sup>り</sup>事<sup>り</sup>不<sup>り</sup>

居<sup>り</sup>合<sup>り</sup>出<sup>り</sup>



右に強於陣下以役入板多履少石列郡奉行  
と野半右衛門及今在通状下  
村送を中入然其元未者何角中  
有之格今集去阿江所限玉中代  
無少如在之何在之對之急中  
於中急度中附之案今在地下之志  
島新中圍中急

天知元酉年

島清平右衛門

吉松儀右衛門友

右御書中字儀之使之者取之披見入り  
左に字儀右衛門友持之見入り  
一郎右衛門氏市三助明神彦右衛門友  
御状新公字儀右衛門友持之見入り  
平右衛門氏右衛門友持之見入り  
右に子細中上野半右衛門友今阿江御歌奉行南



河役人里村新助及水文通等被是と者内  
若事近一様以羽立天和二年成妻此境古水舎  
若新示合り意致在記受

或  
甲浦二子島之儀并 双方出入中誤り覚

一阿州郡奉行今司孫右衛門里村新助百方字宮嶺  
系中在孫右衛門新助子系中及由中

二子孫之儀地中人共何南中役有由系系及等諸中

正西大宮字嶺(水書)松之内中進通系末迄存松  
御代松と中孫河波守様土佐与水系之代之移入  
此系少之系之字各と書合内證言お流之中及系  
中と中進之儀新助中松とつとも系之左松存中松  
彼高之系之阿波水合之諸系之命或此系諸系入中  
中元親水代之抄地帳之書載有由中及新助中松  
諸系之抄地之系子及系之右松此係之系論之松











る等子入ると紙中互に是迄中條の重なる所は諸書  
成安書寫止る可中達と中條為り交

天和二年戊

上野半右衛門

二月廿三日

前贈金吾衛

以上ノ覚

一二子島ノ後別紙書附ノ通ニ居ル此方按地帳紙  
披見ハ阿花由公ノ生ノ何書附成出ニ於中中傳  
止る阿而分領ノ格ノ多クハ中條右格ニ被存此方  
ノ據無クハ阿花由公ノ支配所致ノ由ト可中ト存  
ハ其其公ノ同心可仕云々等々ノ事ト早免細代  
等ト存解ノ其順義新中攻身ノ可致ト内存云  
亦ト其子存家知を云ノ公阿花攝場ノ格ニ於中ハ







前野金吾傳

一宮宮長福寺甲浦云真系古双夕  
飯振有彼多此多其宮宮長福寺甲  
浦云在島崎系左史次入宮之禮大坊上坐  
所請利子少依之承之吾甲浦勤役入宮之禮大坊上坐  
門及金吾傳友在右有通之字也並別中右傳友也中

一此方之山能踏中在找中右有甲浦津之境注還

南金目下通之道有是山境之此道在海邊下几半途  
三建有二金目田際上田を左之見て通了先親是  
之境上甲浦市一重自之此方所船倉之後之乃及  
甲浦之細掛左之之長大之有此之文上十九一八少  
船倉之後東上甲浦之者後上通不細道有是上  
通之道之有方田說之彼方之右細道之境云此  
方之金目田際之道之境上云然也延之宣六年二月



四日不破其石樹心根室津添山華法ハ見合次手  
と有首自在郎高石石連甲浦占ハ越日五日其藝法  
左樹心取ハ長山分ハ水越何長根甲浦法ハ水上ハ其  
右樹心根ハ平左史ハ借住法ハ以物法左樹心夜ハ光  
昔松信左樹心寄入少事法左樹心水連彼ハ三ハ建ハ之ハ越彼方  
此方ハ内ハ既ハ以引合白法ハ甲浦阿ハ越左人ハ下ハ中道ハ境  
と心得何ハ本ハをハ立ハ少ハ有ハ本ハ其ハ新ハ代ハ之ハ上ハ越

依竹身ハ以時節ハ要ハ心ハ未ハ竹ハ身ハもハ不ハ取ハ善ハ也ハ了ハ新ハ水ハ

通張ハ向彼方ハ踏越法外ハ仕形剝切本亦進ハ不取  
久ハ山ハと磯ハ積ハ之ハ善ハ也ハ之ハ様ハ字ハ立ハ左ハ人ハとハ平  
竟ハ二子孫ハをハ本集地ハ方ハをハ踏ハ入ハ高ハとハ地ハ方ハをハ尺通ハ之ハ  
時ハ自ハ之ハ孫ハ丈人ハ志ハ也ハ方ハ丈人ハ之ハ海ハ中ハ阿ハ呂ハ方ハ  
手ハ入ハとハ少ハ手ハ立ハ或ハとハおハ花ハ也ハ

阿呂

波跡ハ与ハ様ハはハ時代ハ仕ハ重ハ是ハ石川ハ之ハ計ハ及ハ水ハ時ハ之



上野半右衛門友

一 前將金吾衛友新信

二子為近邊地人而務出入則推為宮儀

より辨中裁り人老るに生るる有る也

中入面名亦為近邊地人毎年九月十日に祭

阿州淺川浦右部右衛門彌次取扱部

宮儀多居老と甲浦右居老共居

口端書く支

貞享五年子中月宮儀浦右居年有細代

族中右時に於難根白井と助友と打連と助友と

下宿院起ると助友と西宮家と平右史儀右衛門初

中彼方此方と与款時と至書留置と平右史切

西成中右部右衛門右部源治郎格不被甚右衛門格と



始於源氏有之彼我之猶白井と助取也  
前野金兵衛及今亦比高取松と亦是也  
助取と今分と故有之抄左記

阿比志守浪浦在吾年亦中兵衛甲浦在吾  
考吾返是抄中上事

一去年九月廿七日阿比志浅川奥部在徳門と中兵衛  
浦、細船之系、細取、系甲浦九郎在徳門と中兵衛

此方河船屋之縁浦部細一親船也河津急流

方御分下屋上奥以上中兵衛廿八日、茂太郎在徳門  
以是の次郎兵衛九郎在徳門同船仕生見前之系  
を取又志也くり大之阿比大浦との事也細船  
看分一屋上兵衛上中兵衛郎兵衛九郎在徳門同船仕  
茂之浅川之者奥は出中兵衛為學抄前之茂下代見也  
系は河を在彼者以中兵衛任其意中事

一右之以後十一月廿七日宗浪在吾年亦中兵衛借兵衛在吾



甲浦在屋平左丈年宗儀右衛門方書状云哉中

詔當此金目大浦細代云昔九月下旬以淺川浦迄

順吾細遣細代中如其許辨作以次郎兵衛九郎右衛門

能新書在治作去其許、右連口所右能成由承中中

前慶之子高細讀有之如其許或此方之細代云云

中與其許、口所右能成後新書不能分所中各能如

何思石川之様子也按、能信所可新中中為其信也

一右之返金目大浦 九月下旬以淺川浦迄云云

細言細代中如其許、口所右能成後新書不

能分所中中如其許、口所右能成後新書不

能分所中中如其許、口所右能成後新書不

能分所中中如其許、口所右能成後新書不

能分所中中如其許、口所右能成後新書不

能分所中中如其許、口所右能成後新書不

能分所中中如其許、口所右能成後新書不



返状巻中

一同古七百字喰惣惣兵衛傳兵衛方中戦り浅川と志共  
右に松子お房の姫少お連所傳中一各治部兵衛九郎右  
衛門のお房は昔より有る姫と有る人書状に持戦り  
治部兵衛九郎右衛門の松子お房の姫我々共船乗お是  
松子と浅川と志共の附生先達と有る急名長屋と有る  
大へ大浦と有るも鯛おの急名一と有る由中其の由と有る返状

浅川と志共の附生先達と有る急名長屋と有る

浦に被召上り何とも分別の急名由中其の由と有る浅

川と志共甲浦と志共船に仕立置る鯛獲仕り困法

通口を取出由中其の由と有る惣惣兵衛傳兵衛中其の由と有る取

り大浦と志共細代と有る取中其の由と有る急名長屋と有る

急名長屋と有る惣惣兵衛傳兵衛九郎右衛門と有る急名長屋と有る

急名長屋と有る惣惣兵衛傳兵衛九郎右衛門と有る急名長屋と有る

細代と志共此方地下又子及孫中其の由と有る急名長屋と有る



ハ其ノ由中一双方其公ニ事終中々

一当二日六日官喰惣兵衛ノ書状中裁ハ去

冬より中進ノ通重月大浦ノ細代甲浦ニ由り次郎兵

衛九郎右衛門淺川淺師共、中歩細ノ口甲浦上ニ在り或

又去右松茂中歩細ノ邊ニ寄り中一裁出

一右ノ返答去秋淺川左馬浦、區留細ノ書状此浦

上ノ船ノ後中歩細法ノ通奥口新代右漢場甲浦方

被依置ルハ新代何角書不中由、此ノ方又此ノ終

再此ノ地自先規入相、擇仕来ル故孫何方ノ水分トモ

不中由、ハト甲浦左馬年寄共ノ返状中裁出

一又二月廿六日官喰惣兵衛ノ書状裁中裁ハ

先規ノ漢場入相ノ旨次郎兵衛九郎右衛門中由新代中

ハ其ノ兼る事浦漢師共ノ裁出、此ノ漢下ノ繩

結中細筋中細打細志トハ其地此ノ邊入相ノ仕来

方中ハ細筋あり世細筋細地國ノ系繩左ハ海



去船亦生從先年入相多無一七中中其以甲浦  
獵師其取為返多無一人七中裁出

一在返多入相有無品新信少中其細細牙也細大  
細類入相多無一信此方多無及業中淺川名細  
取新中地若一細類多無一水中地多無一少細  
打細等其地獵師名吾常一攝信業一由  
物更次郎吾細九郎若無一入相一七中他國多業

指止可中七甲浦多無一返狀中遣中

一三月十三日安領分書狀善哉少一為對決仕存七中  
裁中身多分口上之返事仕皇四月十九日書狀善哉  
同十七日惣之為信之衡外浦又五郎右衛門右史甲浦七  
裁中中

一物之衡中其七吾細之以金目大浦此方之細代言  
淺川者細取中地次郎之衡九郎右衛門何之連急也  
存く甲浦七口為取中事而之強心得存度之書狀七也











若る際入中りあはる共十日其相訪可中甲申之  
お也りはる若役又在事給るは八如甲申其  
茶も有るはあ度近中甲申其  
し也る各油以て成る浦甲浦其  
波之帯危角彼地之極子可中  
別儀も有るは百六甲申其  
吾胸中申其右中通るは  
一在右浦と云はるは

申言候は候編細申す世細大細  
海士船申す候持候は  
新ハ阿あはるは入相  
甲浦申す候は時其候中甲申其外甲浦  
金目大浦申す候は島  
孫ハ甲浦編場大細  
不中申言候は年  
己三月廿三日



竹ヶ島より見て鯛見片中御兵衛大綱部張糸の内  
と右側の中者綱の糸と此処甲浦綱糸合差為り  
置子中惣糸は端よりむしり合字喰村君等右側  
の糸より又惣取糸甲浦の二七と中水五字喰片大惣  
取糸の右三七と字喰と次第長兵衛と中者其外二文  
早速甲浦と連糸中松と若本者共又惣取糸の事  
沙汰し限り、存心忘れ松と中者其通り、此

波地と和名居甚兵衛と相渡中其後拾九年心

糸、竹ヶ島の内室より甲浦綱綱糸中延、字喰大  
綱、村君等右側の外、三文和字糸中様、能を  
磯新仕出鯛の終り中者取山、是の中水と為  
字より大浦線波石金同取和石、後、子より大綱  
糸、取る阿取者、是のせ子中者、取端師、子、持在  
美中通如、在御、能、其、以上

貞享二年  
丑五月八日







島濟平古史

古例

一 淡路の松次郎 古例

一 淡路の松次郎 古例

一 淡路の松次郎 古例

一 甲浦と兵喰の境 金目大浦と鯨波石也と云々

一 甲浦と兵喰の境 金目大浦と鯨波石也と云々

一 便差越等々 何角実等々 災後結去 去年子九

一 小船計般云 甲浦と系 輝師九郎右衛門方 宿を取而

一 金澤留白浪生見 通々 鯨波石也 鯨波石也 金目大浦と

一 志也く 波石と云々 少 鯨波石也 甲浦と立矣 分一層と右

一 鯨波石也 甲浦と系 輝師九郎右衛門方 宿を取而

一 在淺川の右部右衛門 輝引仕 同船 志也 沖立仕

一 但所召 輝又 甲浦と系 留輝仕 時々 先年

一 甲浦と輝師九郎 志也 沖立仕 系 此例 筆々

一 淺川輝又 存知 附次郎 兵衛九郎 右衛門 志也



拾好... 由

一在猫口甲浦... 年...

義方地下... 年...

五日... 文...

熊... 事...

... 城...

二三日... 浦...

... 部...

... 取...

... 取...

... 取...

... 取...

... 進...

...

川...

...

田井傳兵衛

貞享二年丑

...











若者其許上次郎兵衛九郎右衛門右連五郎由新

任下川生所淺川之権師古中分と少お連之義

今一居右五人手前所居新成事一昨の新任中川

所張屋之新礎心強任其子五郎右衛門傳

右衛門進中川委細所指之新任男可新下

忍性清言

喜儀在居

丑 丙辰月十日

川端惣兵衛

甲浦在居

口不亮

多崎所居在史稿

日井傳兵衛

右寄儀之書状因下江之居傳右衛門組長五郎右衛門

甲浦在居平左史方持系任五人口上之義

一昨の傳右衛門使と一以書状中達の如く報

新と淺川權師古中分と少お連有之由今一

右甲浦権師次郎兵衛九郎右衛門手前所

居之如新下

一居右平左史良刻中其之宗前之由書才能

心為如所新折希先後右衛門我合少中



且鞍籠は由中川へは通口上と語故とも返

状は中川左の甲浦より小室の右邊の方と持

世裁、括り有、八右邊の方と新集の年録

藤師は中川左邊の中川

一五部右邊の傳右邊の中川と甲浦藤師取次

部兵衛九部右邊の中川と有、是を以て目大

浦細代と同右浅川藤師取次を右邊部兵衛

田字嶺左邊の甲浦より中川と有、是を以て目大

中川と返事有、中川と有、浅川と中川と有、

由中川

一五部右邊の中川と有、部兵衛九部右邊の式として有、

淺場被名は中川と有、中川と有、保右衛門

取次と有、甲浦と有、是を以て藤師は中川と有、

定るは右邊部兵衛九部右邊の何角中川と有、

浅川と有、是を以て甲浦と有、中川と有、是を以て



中書

一傳右衛門中少輔右近衛守  
忍也母生母の由中書

一平右史中少輔右衛門守  
中書少輔右衛門守

阿良重自大浦細代  
左部兵衛九郎右衛門中少輔

上被方振しゆ分と新傳りる海才と事と一と

一五郎右衛門中少輔  
深りり阿良重と少と也也  
細引中少輔細代と中

一奥より中少輔  
奥より中少輔  
奥より中少輔

る中少輔と存右と通り由中



一平右史中川吉吉松等右衛門少輔度り是返

是可仕由言按段早中川

但本陣に軍益を際入用迄書按如形

右照之書附子十月十日的神意右衛門福留權五郎

下元右衛門左近治崎平右史年寄吉松俊右衛門

同良仕之助宅右孫越要細中受右之越上野平右衛門

川前陣重兵衛方上も一可中達方中川能又役人右右

何の事も平右衛門重兵衛方中川能後替延引兵相又

寄食返是之役何なるも口上之場中寄事右孫越

初寄食右寄右史方之返是之越浅川者中川と打達

由は左彼地中越成を右子細右甲浦陣師次郎兵衛

九郎右衛門等岩越等右浅川臨船之事右右中川

右之船乗加り沖立仕等経等之右有辨右寄食

中達之應事之始

一重目大浦之細代右有之等甲浦者越方不取中川由







臣以領事甲浦領先次郎兵衛九郎右衛門一切事由可

中事

一 魚以取中役事甲浦上生人船為採竹所古法以取中

田の中事

右之通甲浦在居所先交中至子十月古所之害候在居

方古先由分口上之靜り中分中候取物

一 右之領事書状記事通

一 甲浦領事書状記事通

一 甲浦領事書状記事通

右一所之領事十二月三日所仕置才迄進中事

一 為且二月古下無噴之居充古甲浦在居所事古

亦右領事書状差候中文云云

能一筆致候古先領事領事書目書交

中細書候古書目古浦之役事古書目之何處候

一 為陣止所裁事遊中候中事前候事以返事古







右字處之善哉其書狀甲浦之居充之と助方と拍系

信自即刻以村送之部上窺彼地也返之と某文

御信置申分所所善島之通返状謝之世也其言如左

先夕令既所張札致持免り如所年始りて之層

中細若弥所事之成以所部由所所存存

之許所交之等事之部也

一去年秋淺川之島浦に新築還留有之編織也

新築は浦上之島に新築還留有之編織也

部右極下下所所之申進由所信歩り以前路也

味何角在分中由所所也又此後段再吹也

お召之也若彼分入相、攝仕等、在弥何方、以分

とも分中、由、所所也其分所也

忍將傳言

二月十五日

甲浦之居

信崎平右衛門

日下年事

若 招儀右極下



菅原房房

川端惣兵衛様

日不亮

田井傳兵衛様

右ノ通返状細事也甲浦之屋元方之也是之再  
報之致由以上ノ事裁取立方又菅原之書状是裁取文  
言如左

昨夕之書前ノ日水被致付之候之金目

大浦細代之義之元以郎兵衛九郎右衛門方ノ水

由之由之

由之由之

一先規之漢場入相之旨次郎兵衛九郎右衛門方ノ由之

位ノ中ノ水之苗浦様所之取之申之候之鯉様

下之繩之細小細釣又之小細釣亦之申之旨

之申之旨之通入之候之候之申之旨

一細細申之細細細他之申之系繩大ノ海士

船中先年ノ入相之旨之申之旨



許漢師名大所君所授所報之於此中

忍於修言

丑 二月十五日

宮内省

川端總兵衛

日下年考

田井傳兵衛

甲浦之左

島崎雪左丈振

日下年考

吉松俊右衛門振

返美川島文新所授所報之於此中

甲浦其候意也入中振之

甲浦其候意也入中振之

大綱類似令錄為同書浦考之者

不仕甲浦中身得之

如片之存也

由新依下甲書狀細也

片也中甲文言如左



宣前之有... 状致持見此

一先親之權場入相... 進中地入相有... 不要

細沙依少... 大細... 入相

其... 浅川... 細

右... 細... 入相

其... 權... 入相

次郎兵衛九郎右衛門入相... 後... 他

差... 通... 何

お... 急... 可

新... 言

三月二日

甲浦

島崎

日

吉

...

川端

...

田井傳兵衛



右之通書狀恐甲浦庄原年寄方也三月

十三日又寄管之書狀善哉中文言如左

金目大浦細代為去秋淺川者編名中  
度之以書狀中尋亦返了了語令所知  
今近於位哉語何也語亦中得是亦亦  
此等事上之沙汰之及下中報報之以是  
此如月平為思召方及之於位中以此為  
之役在極位位也子好等故各指名在亦  
其の場の故也其通之仕度存亦之

為有文通在都位位哉位位也  
今之為致為終見中亦存亦亦亦亦亦亦  
出之於故也中亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦  
恐惶謹言

三月十三日

吉原庄原

川端總兵衛

日下平家

甲浦庄原

田井傳兵衛

島崎平右史抄







年寄占近与甲浦占新羅哉此振中世之始浦占  
原想吾初年寄傳兵衛兵組郎右衛門八右史同通  
化同月十七日甲浦占系寄友史方之双多案成之語也  
左

一惣兵衛中川吉秋之氏事自左浦此方之細代之  
淺川者細代中地次郎兵衛九郎右衛門何之  
幸之意也甲浦占口為名中多我之語也存之

書狀中述之由御為法言は此界上り由又其後  
之入相之辨は年之新代出也中辨入相

一水産中川吉秋代忠繩之入海士權等入相之  
意之通中進出之吉頃双市役人中立等中御此  
方役人中川吉秋被代之代墨之代何ふこし  
占此方之辨師之代中多友史又又占此方之海  
占甲浦之辨師之代自今以後新案出之代  
代之代右代左存之始細細之代ハ大細代之  
地次郎兵衛九郎右衛門何之遠之代等之代



形有<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>寫<sub>レ</sub>遠<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>却<sub>レ</sub>存<sub>レ</sub>中<sub>レ</sub>十<sub>レ</sub>寸<sub>レ</sub>亦<sub>レ</sub>右  
又<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>當<sub>レ</sub>仕<sub>レ</sub>ハ<sub>レ</sub>彼<sub>レ</sub>處<sub>レ</sub>也<sub>レ</sub>新<sub>レ</sub>仕<sub>レ</sub>ハ<sub>レ</sub>字<sub>レ</sub>治<sub>レ</sub>ハ<sub>レ</sub>役<sub>レ</sub>者<sub>レ</sub>也<sub>レ</sub>中  
ハ<sub>レ</sub>治<sub>レ</sub>ハ<sub>レ</sub>時<sub>レ</sub>物<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>中<sub>レ</sub>ハ<sub>レ</sub>字<sub>レ</sub>治<sub>レ</sub>歸<sub>レ</sub>大<sub>レ</sub>人<sub>レ</sub>志<sub>レ</sub>也<sub>レ</sub>中<sub>レ</sub>ハ<sub>レ</sub>大<sub>レ</sub>  
之<sub>レ</sub>事<sub>レ</sub>也<sub>レ</sub>此<sub>レ</sub>字<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>寫<sub>レ</sub>仕<sub>レ</sub>置<sub>レ</sub>右<sub>レ</sub>ハ<sub>レ</sub>如<sub>レ</sub>也<sub>レ</sub>重<sub>レ</sub>目<sub>レ</sub>大<sub>レ</sub>浦<sub>レ</sub>ハ<sub>レ</sub>寫<sub>レ</sub>  
海<sub>レ</sub>ハ<sub>レ</sub>小<sub>レ</sub>嶺<sub>レ</sub>仕<sub>レ</sub>也<sub>レ</sub>通<sub>レ</sub>中<sub>レ</sub>外<sub>レ</sub>ハ<sub>レ</sub>役<sub>レ</sub>甲<sub>レ</sub>浦<sub>レ</sub>在<sub>レ</sub>嶺<sub>レ</sub>也<sub>レ</sub>新  
年<sub>レ</sub>寫<sub>レ</sub>也<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>役<sub>レ</sub>又<sub>レ</sub>大<sub>レ</sub>中<sub>レ</sub>付<sub>レ</sub>ハ<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>海<sub>レ</sub>中<sub>レ</sub>ハ<sub>レ</sub>

一<sub>レ</sub>重<sub>レ</sub>目<sub>レ</sub>大<sub>レ</sub>浦<sub>レ</sub>ハ<sub>レ</sub>如<sub>レ</sub>仕<sub>レ</sub>者<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>双<sub>レ</sub>布<sub>レ</sub>役<sub>レ</sub>又<sub>レ</sub>中<sub>レ</sub>西<sub>レ</sub>書<sub>レ</sub>考<sub>レ</sub>ハ<sub>レ</sub>御<sub>レ</sub>録

海<sub>レ</sub>ハ<sub>レ</sub>小<sub>レ</sub>嶺<sub>レ</sub>仕<sub>レ</sub>也<sub>レ</sub>通<sub>レ</sub>中<sub>レ</sub>外<sub>レ</sub>ハ<sub>レ</sub>役<sub>レ</sub>甲<sub>レ</sub>浦<sub>レ</sub>在<sub>レ</sub>嶺<sub>レ</sub>也<sub>レ</sub>新  
年<sub>レ</sub>寫<sub>レ</sub>也<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>役<sub>レ</sub>又<sub>レ</sub>大<sub>レ</sub>中<sub>レ</sub>付<sub>レ</sub>ハ<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>海<sub>レ</sub>中<sub>レ</sub>ハ<sub>レ</sub>

重<sub>レ</sub>目<sub>レ</sub>大<sub>レ</sub>浦<sub>レ</sub>ハ<sub>レ</sub>寫<sub>レ</sub>海<sub>レ</sub>ハ<sub>レ</sub>阿<sub>レ</sub>良<sub>レ</sub>ハ<sub>レ</sub>衣<sub>レ</sub>ハ<sub>レ</sub>嶺<sub>レ</sub>仕<sub>レ</sub>也<sub>レ</sub>振<sub>レ</sub>也<sub>レ</sub>

新<sub>レ</sub>仕<sub>レ</sub>也<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>也<sub>レ</sub>哉<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>折<sub>レ</sub>者<sub>レ</sub>ハ<sub>レ</sub>何<sub>レ</sub>也<sub>レ</sub>阿<sub>レ</sub>也<sub>レ</sub>而<sub>レ</sub>多<sub>レ</sub>新<sub>レ</sub>折<sub>レ</sub>

在<sub>レ</sub>也<sub>レ</sub>想<sub>レ</sub>也<sub>レ</sub>嶺<sub>レ</sub>仕<sub>レ</sub>也<sub>レ</sub>何<sub>レ</sub>也<sub>レ</sub>中<sub>レ</sub>ハ<sub>レ</sub>何<sub>レ</sub>也<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>及<sub>レ</sub>也<sub>レ</sub>何<sub>レ</sub>也<sub>レ</sub>

合<sub>レ</sub>也<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>集<sub>レ</sub>也<sub>レ</sub>何<sub>レ</sub>也<sub>レ</sub>沙<sub>レ</sub>法<sub>レ</sub>ハ<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>及<sub>レ</sub>也<sub>レ</sub>事<sub>レ</sub>也<sub>レ</sub>中<sub>レ</sub>ハ<sub>レ</sub>何<sub>レ</sub>也<sub>レ</sub>重<sub>レ</sub>目<sub>レ</sub>大<sub>レ</sub>浦<sub>レ</sub>

中<sub>レ</sub>其<sub>レ</sub>也<sub>レ</sub>函<sub>レ</sub>也<sub>レ</sub>役<sub>レ</sub>也<sub>レ</sub>推<sub>レ</sub>量<sub>レ</sub>也<sub>レ</sub>遠<sub>レ</sub>也<sub>レ</sub>意<sub>レ</sub>也<sub>レ</sub>何<sub>レ</sub>也<sub>レ</sub>中<sub>レ</sub>ハ<sub>レ</sub>何<sub>レ</sub>也<sub>レ</sub>

存<sub>レ</sub>也<sub>レ</sub>何<sub>レ</sub>也<sub>レ</sub>中<sub>レ</sub>ハ<sub>レ</sub>何<sub>レ</sub>也<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>中<sub>レ</sub>ハ<sub>レ</sub>何<sub>レ</sub>也<sub>レ</sub>在<sub>レ</sub>也<sub>レ</sub>何<sub>レ</sub>也<sub>レ</sub>也<sub>レ</sub>先<sub>レ</sub>也<sub>レ</sub>何<sub>レ</sub>也<sub>レ</sub>

重<sub>レ</sub>目<sub>レ</sub>大<sub>レ</sub>浦<sub>レ</sub>ハ<sub>レ</sub>寫<sub>レ</sub>海<sub>レ</sub>ハ<sub>レ</sub>阿<sub>レ</sub>良<sub>レ</sub>ハ<sub>レ</sub>衣<sub>レ</sub>ハ<sub>レ</sub>嶺<sub>レ</sub>仕<sub>レ</sub>也<sub>レ</sub>振<sub>レ</sub>也<sub>レ</sub>



一 亦考文 據手片 引込 暫在 符 被 出 凡 新 野 書 先

程 此 位 吹 名 思 不 考 之 是 古 書 之 或 七 十 四 信 先

市 中 川 七 毛 頭 為 殘 事 事 之 七 十 中 能 更 更 古 之 事

川 七 先 程 之 其 信 故 當 能 返 其 山 能 成 古 免 角

地 中 人 在 七 波 水 被 是 今 而 十 八 十 中 下 熱 之 處 也 初

傳 之 處 五 郎 右 殿 一 同 中 川 八 十 信 去 秋 之 永 之 事

書 狀 之 事 之 指 的 事 中 川 八 十 事 是 亦 會 出 亦 不 存

此 事 中 川 八 十 事 是 亦 會 出 亦 不 存 又

之 事 使 又 亦 考 文 以 亦 考 文 以 後 數 通 之 事 狀

也 以 亦 考 文 以 後 數 通 之 事 狀 也 以 亦 考 文 以 後 數 通 之 事 狀

急 速 之 事 之 亦 考 文 以 後 數 通 之 事 狀 也 以 亦 考 文 以 後 數 通 之 事 狀

延 引 之 事 之 亦 考 文 以 後 數 通 之 事 狀 也 以 亦 考 文 以 後 數 通 之 事 狀

也 以 亦 考 文 以 後 數 通 之 事 狀 也 以 亦 考 文 以 後 數 通 之 事 狀

通 之 事 之 亦 考 文 以 後 數 通 之 事 狀 也 以 亦 考 文 以 後 數 通 之 事 狀

也 以 亦 考 文 以 後 數 通 之 事 狀 也 以 亦 考 文 以 後 數 通 之 事 狀

也 以 亦 考 文 以 後 數 通 之 事 狀 也 以 亦 考 文 以 後 數 通 之 事 狀







如左

一、日外は表の部位は、尾地、又はお渡りの中、入田中、  
渡り地、又、内居会、中、志、有、外、取、込、者  
中、延、引、之、張、奴、の、部、角、事、難、成、是、が、お、渡、り、中  
お、り、今、の、お、り、中、違、也、但、助、主、自、分、の、お、渡、り  
之、中、者、お、渡、り、前、の、在、居、先、法、事、以、外、取、込  
是、中、由、中、出、也

一、此、書、は、長、年、の、事、及、日、外、に、お、り、成、り、お、渡、り、  
は、是、れ、お、り、入、田、中、の、事、多、分、お、渡、り、也、

在、居、保、中、渡、り、一、段、五、十、一、の、地、の、事、在、居、有、  
前、席、中、通、り、方、は、僅、僅、も、不、成、る、由、中、裁、也、以、上

貞享三年丑

七月十二日

白井 助 岩

御奉行所















中川尚郎後着時其旨將詳言

十一月十九日

甲浦

八右衛門

江戸屋

傳古御前様

言事有交々水返状致拜見し和後以海部片紙致  
所々物迄仕立給ふ繩舟に後々海部御前内張り付

仕立有之る事其旨其旨先辨御前大目録中達し得

有阿高浦浦高年々置ふ中核御前御中達し得

也例年々通繩船系り得る事速く其旨先辨御前

ハ兼中達し通繩船沖合改道し不々事先辨御前

有也成仕り得る事如何と申し心先存し御前御前御前

障中事々々ハ船先と一ハ何角と申し御前御前御前

有也先々々々事先辨御前御前御前御前御前御前

城下と申し事先辨御前御前御前御前御前御前御前



了張越り字刻面上、録之と可なり意は

長修譯言

子  
案月廿一日

江戸屋

信右衛門

多賀八右衛門様

從也書奉、繩船并細代之、奉身阿良宗信

甲浦との取巻之、完

一子十月十日、繩船之、後、付、宗信、為人、江戸屋、信右衛門

一甲浦、八右衛門、方、片、是、越、中、張、状、奉、通

一曰、八右衛門、方、以上、書、之、返、事、奉、通

一曰十九日、八右衛門、方、信、右、衛、門、上、之、返、状、奉、通

一曰廿一日、信、右、衛、門、方、再、報、奉、通

又四通別張、字、奉、上、之、出、入、名

一右繩船、後、兵、庫、伴、青、山、大、孫、様、少、領、中、之、者

毎年、冬、元、日、系、冬、中、八、權、仕、奉、中、中、結、廻、近、年











本年のハ何れに有るに中書

是の由より阿波長門細平巻身書信と甲浦

書信

一書信の書信は長門細平巻身書信年書信

信其書信は通るに信和あり

一書信の書信は通るに信和あり

一甲浦細平九郎書信は通るに書信

一書信の書信は通るに信和あり

持集甲浦書信は通るに信和あり

古書古書列の書信は通るに信和あり

書信の書信は通るに信和あり

書信の書信は通るに信和あり

書信の書信は通るに信和あり

書信の書信は通るに信和あり

一書信の書信は通るに信和あり















貞享元年

十一月廿七日

甲浦役人

下元右衛門

福多權右衛門

島崎平右衛門

年表

吉松儀右衛門

# 白井興助殿

阿比呂言噴之居年表之甲浦之居年表之

洛場之儀之往返之卷

一右字倉書状江戶右衛門組頭五郎右衛門支又持

系甲浦右衛門方右直時分系之新浦以西刻平

右更方片右衛門回道之新裁夫之上刻近右右

状右連平右更披免仕右老儀右衛門等之腰根浦

敬之取炊者中右平右更平出合

一使右入以上之惣兵衛傳兵衛中右之一昨右傳右衛門使止



























日辰居

島崎重吉文

日年

吉松隆右衛門

白井與助殿

重吉文 候子十月廿九日 寢處 上 是 哉 申 免

一 與助及此信少 且 喜 嘆 今 有 慶 目 之 使 以 又 之 内

此部右衛門中川大浦之海峽等々 中川右衛門等々 中川右衛門等々 中川右衛門等々

吾 洞 兼 之 台 於 地 在 主 部 右 衛 門 中 川 右 衛 門 阿 部 公 子

之 古 有 之 可 矣 哉 且 以 乃 乃 成 何 也 甲 浦 没 人 申 在 居

老 中 之 川 也 大 浦 之 磯 岩 等 之 中 之 阿 部 公 子 之 所 在 也

上 川 右 衛 門 之 是 之 右 衛 門 之 使 彼 地 上 亦 有 矣 之 所 在 也

上 之 所 在 也 之 所 在 也 之 所 在 也 之 所 在 也 之 所 在 也

船 之 系 亦 中 之 所 在 也 之 所 在 也 之 所 在 也 之 所 在 也

之 所 在 也 之 所 在 也 之 所 在 也 之 所 在 也 之 所 在 也











城下當書之彼淺川者大浦之錫取中其魚分

一支配之者之淺川權人呼以味有之也右治人者

九月下旬、甲浦之系白浪口生見河石大浦三所

取中其味有之味有之味有之味有之味有之味有之

地部之甲浦之口住修治之味有之時河川者中其

之甲浦治之治部共治九部右治之味有之味有之味有之

甲浦之口住之味有之味有之味有之味有之味有之

味有之味有之味有之味有之味有之味有之味有之

之味有之味有之味有之味有之味有之味有之味有之

九部右治之味有之味有之味有之味有之味有之

昔之進出書状と河返り之味有之味有之味有之

之味有之味有之味有之味有之味有之味有之味有之

地部之味有之味有之味有之味有之味有之味有之

中括、思業之味有之味有之味有之味有之味有之

一平之味有之味有之味有之味有之味有之味有之



水邊之魚也神或為水神是也水役人極忠也

押斗也格也信也信之立也立可謂一也也

魁角名格思石部也中中中中中中中中中中

一惣言也信也信也信也信也信也信也信也信也

石名上中中附也信也信也信也信也信也信也

一平言也中中中中中中中中中中中中中中中中

中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中

中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中

中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中

中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中

中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中

中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中

中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中

中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中

中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中







一惣高傳新中州左中右次郎新九郎右衛門上代  
分る事ふ中州左中右次郎新九郎右衛門上代

一平右衛門中州左中右次郎新九郎右衛門上代  
新目方浦細代新取中州左中右次郎新九郎右衛門上代  
と中州左中右次郎新九郎右衛門上代  
新目方浦細代新取中州左中右次郎新九郎右衛門上代  
新目方浦細代新取中州左中右次郎新九郎右衛門上代  
新目方浦細代新取中州左中右次郎新九郎右衛門上代

新目方浦細代新取中州左中右次郎新九郎右衛門上代

一海牙新目方浦細代新取中州左中右次郎新九郎右衛門上代  
新目方浦細代新取中州左中右次郎新九郎右衛門上代

一惣高傳新中州左中右次郎新九郎右衛門上代  
分る事ふ中州左中右次郎新九郎右衛門上代

一平右衛門中州左中右次郎新九郎右衛門上代  
新目方浦細代新取中州左中右次郎新九郎右衛門上代  
と中州左中右次郎新九郎右衛門上代  
新目方浦細代新取中州左中右次郎新九郎右衛門上代  
新目方浦細代新取中州左中右次郎新九郎右衛門上代



一 惣高申の事は通達付るは多し、細代と記し書状生るは、

其の上より、其の役又其の後の事、形中、後等、又其の編

事、付中、其の事、其の事、其の事、其の事、其の事、其の事、

此の付、右、左、右、左、右、左、右、左、右、左、右、左、

一 其の事、其の事、其の事、其の事、其の事、其の事、其の事、

其の事、其の事、其の事、其の事、其の事、其の事、其の事、

其の事、其の事、其の事、其の事、其の事、其の事、其の事、

其の事、其の事、其の事、其の事、其の事、其の事、其の事、

其の事、其の事、其の事、其の事、其の事、其の事、其の事、

其の事、其の事、其の事、其の事、其の事、其の事、其の事、

其の事、其の事、其の事、其の事、其の事、其の事、其の事、

其の事、其の事、其の事、其の事、其の事、其の事、其の事、

一 其の事、其の事、其の事、其の事、其の事、其の事、其の事、

其の事、其の事、其の事、其の事、其の事、其の事、其の事、

其の事、其の事、其の事、其の事、其の事、其の事、其の事、

同、道、此、我、等、道、気、毒、其、存、り、は、有、不、及、是、終、業、也、











此其信傳之勘是に書きしを以てかゝ阿茶女あり  
中より平右衛門中より五郎右衛門及信成の方以前より信  
子お遠く少座有る事ありと申す

一五郎右衛門傳在勘の中より大浦に磯昔灘を以て大  
中又おる細引中延き細代と申す

一平右衛門中より夜と灘大人と細代と中より一例ありと  
一惣高傳之勘中より先回前より格に存り何れ細引

中延き細代と存り此の格細引を磯に以て申すとの格に  
兼りゆと申す

一平右衛門中より如信細を磯に以て附する事志しや去る依  
る浅川磯名も大浦に磯名附たりと申す可有  
と申すは如何なる急角と申す

一又平右衛門中より何卒新物成る事も思出来たり格も  
此信格お考五日十日の由に書き申す進まぬ可有  
此格に在格なきこと成る事申す通出方と云彼又方と  
此中連る事格も申す此格も申す此格も申す先程被



仙通新思石可新下中七帳乞仕夜半新在少新  
七ツ多女リ中リ

一物志徳方方善水付子料理新批迫下中

貞享元年  
十二月朔日  
高崎平左文  
書判

廻船

八右衛門  
書判

白井與助之不破甚右衛門仙石源次郎達方

村送之

一嘉九月中旬頃甲浦片阿呂淺川穉師小船四艘

之船細柄系仕甲浦九郎右衛門上中者方宿取仲者

之例之通甲浦穉師高次郎方穉師同船甲浦源之

内阿呂大浦出方志也之方之方并阿則重同神







使として書状を裁中へ申上り申す  
右名倉の前方に状に大浦に細代と申すを志す  
と已世より申裁中大浦に碓氷名倉申上り急なる中  
ゆる幸に存り子細を言不申裁然通大浦細代と  
有る時方何方を志す細代と申す申す言不申  
方何領方と申す一阿ふ人以後に在る申す存  
在返る能事存り右名倉と申す取に取  
浦碓氷名倉急なる由五郎右衛門新住に結地を治郎  
兵衛何角申す存り右名倉に存り此後城下申す  
通り方以外曲事申す申す附申す言不申す  
此是を序に叙ふ此於臺臺城下申す申す  
空腹と為知る為に能知合申す言不申す  
申す申す申す申す且申す申す申す申す  
申す申す申す申す申す申す申す申す  
申す申す申す申す申す申す申す申す  
申す申す申す申す申す申す申す申す











十二月三日

白井興助

不破甚右衛門様

仙石源次郎様

別紙を左様上仕出

一化國の御湯之末太人繩船迄其以之櫻梅之障敷

甲浦前庭等実食浦迄師之甲浦迄師共方石

船置方中様中様日又右繩船之美舟実食方

甲浦八右衛門様中様方上右人少持書状若越中様

右之御書附状之是名之案共甲浦役又共方若越

中様則此方浅川迄師一巻之若梅化刻之先例

之甲浦様師自附同前仲見之案若越之在何

右方毎度系案之若梅之御別之掃成由役又

之甲浦様師自附同前仲見之案若越之在何

此下様 恩懐 謹言

白井興助



十二月三日

白井善助

不設甚右衛門格

仙石源次郎格

阿州守信浦左左衛門尉中兵衛甲浦左左

右衛門尉中兵衛

但此張面全文を以て内編記に附不載也

甲浦左左衛門尉中兵衛附之内用一処抜書

免 但此子右内編記有之書抜之在記

一去年九月六日阿州浅川右衛門尉中兵衛者細水素

甲浦左左衛門尉中兵衛者右借其右則右

主回船名操之去羽立之長九郎右衛門次郎之裔同船仕

生見前其外全自志之之入阿比大浦之

右細水素少之右甲浦左左衛門尉中兵衛一家片奥

口出書事







代中家終て不承中遣り事

右に淡路双方中分

一甲浦に者若中り大浦と志也くりて其外  
船屋に後る大浦中地り等所種共小  
細打細敷先紙分土取所入相に細細  
先年甲浦に有る時共多分攝付甲浦に淡路  
金目大浦に取等為る一追に内か立入

一甲浦大細是阿取に者先従先統細是  
己世ふ中由る事

一寄喰居居年系中越共繕攝下ケ繩言志に小細  
初其外小細打細取共阿取土取入相に付来共  
己に細あり世細細細他共系繩大へ海士攝  
若共先統分入相に付阿取分攝付来共  
一寄喰に者若中り大浦と志也くりて其外  
郡奉行出居り等所取に役人中淡路に子孫  
録大に志也くり大に志也双方に當て立志也阿取



之由外六宮喰之攝師共老之方安然又之由外六宮  
之由外六宮喰之攝師不系以長中渡世之志又

以上

貞享二年六月

甲浦之阿州宮食攝場之儀貞享二年六月

甲浦之阿州宮食攝場之儀

一阿州淺川浦攝師左部右衛門甲浦之系本白之途  
縮攝師白一層之急以召置之甲浦之系本白之途  
中本攝師白井之助之知中城其上之甲浦之系  
是哉安之極子系本之助免書攝師之儀  
十九日遣所身之処所系本之助免書攝師之儀  
後之意之成也右之攝場之儀極可極可也







思召る由有先其大中東路之宗所可学得り候  
也可有少少困境之憂れ候事不轉る事江左占  
お窺可申り務事書附を申上り候事等々遊の  
新付方候事急事

右通事お窺お淋甲浦表内御申附言  
左通事お返事申上り候事

但此等事書取書載候事何事候事

別紙に記置者也 不皮甚右衛門

仙石源次郎

野根甲浦阿州宗良朝浦釣獵入相中合并甲浦阿  
於竹ヶ島金目破換船之節浦形出中合許文之字

元禄四年

未、六月十八日

付成 此等事書中合之事已四月甲浦方一段川村史右衛門

お尋ね候事申上り候事

覚

一甲浦之候外之働事以御説石魚之浦之少番近奉



一 無遠身地中人患惑此也似以奉祈雨之竹置中上  
以爲浪浦之小網之人繩切去或稱師招五又浪船之  
艘之無不阻甲浦之者其爲竹剪去者多爲正月近甲浦  
之島中地過之爲小網漁仕甲浦之漁師才も大形竹是  
於甲浦之漁船九艘仕中竹結之由爲浪漁師共  
相考也其所以能分海辺之漁船也世々々々甲浦之海上  
阿波分其方浪船之境及船分の種也其年也方  
と阿波分の人繩其外一切の竹浪深の外海に入相  
浪分竹中食少種也其甲浦之島年寄阿波言信  
新浦有浦之島年寄共方其外海之一切  
竹網之相仕食方波打浪也子速之相之可仕食  
致同心漁文之名勢仕身則右之漁文更此記録不  
其浪中竹也右之島甲浦之島也方其也其浪中竹  
年之少物也入也甲浦  
一 其年浦之島部也船末五月方之夜阿波行子島家  
以爲破損仕船糟首物也其島金目二子橋上甲



附此浦手形阿良字倉分中身向後字倉甲

浦中浦手形之字甲浦各各五又船之者其字

倉各各字倉中人能逐系等書如中甲字之通記錄

中甲浦各各老方中身於渡中中中中中中中中

中入置中中

未六月十八日

大谷慧五兵衛

久盛右父友

可海部之内船浦釣船中合修文之字

中合釣漁之覺

一向後野根甲浦字倉鞠浦之他因并自志之其他浦

之繩之入船不入者之事

一野根甲浦字倉鞠浦右四之浦漁師仕者之入繩其外

一切之釣漁入相之仕者之事

一右之通水定中其自於其換儀古乘仕之其通記

相修仕先年之通之仕者

右之先記之繩之入船入於漁之仕者不若其甲浦



新規之繩丈人船出也附向後右之條之通相定中  
左方新位少之附但甚意右之通相定中上之相  
一遠中聲有分者中依る如件

元禄四年

新浦左后

未二月十日

高橋若兵衛

日年考

田中睦兵衛

横山左兵衛

日五人

赤兵衛

平右衛門

五郎右衛門

彦四郎

惣兵衛

甲浦左后

島崎平左兵衛

日年考

吉招儀右衛門及

隱居所無可考一公家文一民間文



新見 阿明字食の流中合修文の字

中合釣獵の流

一 向後野根甲浦字食鞆浦<sup>ト</sup>他因并自志<sup>ト</sup>其<sup>ト</sup>他  
浦<sup>ト</sup>繩<sup>ト</sup>左<sup>ト</sup>入<sup>ト</sup>苦<sup>ト</sup>之<sup>ト</sup>受

一 野根甲浦字食鞆浦<sup>ト</sup>右<sup>ト</sup>四<sup>ト</sup>浦<sup>ト</sup>流<sup>ト</sup>係<sup>ト</sup>出<sup>ト</sup>又<sup>ト</sup>入<sup>ト</sup>繩<sup>ト</sup>左<sup>ト</sup>  
外<sup>ト</sup>切<sup>ト</sup>之<sup>ト</sup>釣<sup>ト</sup>獵<sup>ト</sup>入<sup>ト</sup>相<sup>ト</sup>之<sup>ト</sup>仕<sup>ト</sup>苦<sup>ト</sup>之<sup>ト</sup>受

一 右<sup>ト</sup>之<sup>ト</sup>通<sup>ト</sup>相<sup>ト</sup>定<sup>ト</sup>中<sup>ト</sup>其<sup>ト</sup>自<sup>ト</sup>然<sup>ト</sup>無<sup>ト</sup>授<sup>ト</sup>其<sup>ト</sup>去<sup>ト</sup>來<sup>ト</sup>仕<sup>ト</sup>苦<sup>ト</sup>之<sup>ト</sup>受

凡相修仕苦其年之通可仕受

右<sup>ト</sup>之<sup>ト</sup>先<sup>ト</sup>親<sup>ト</sup>之<sup>ト</sup>繩<sup>ト</sup>左<sup>ト</sup>入<sup>ト</sup>相<sup>ト</sup>流<sup>ト</sup>不<sup>ト</sup>仕<sup>ト</sup>其<sup>ト</sup>去<sup>ト</sup>來<sup>ト</sup>申<sup>ト</sup>浦<sup>ト</sup>

新見<sup>ト</sup>繩<sup>ト</sup>左<sup>ト</sup>入<sup>ト</sup>相<sup>ト</sup>流<sup>ト</sup>不<sup>ト</sup>仕<sup>ト</sup>其<sup>ト</sup>去<sup>ト</sup>來<sup>ト</sup>申<sup>ト</sup>浦<sup>ト</sup>

其<sup>ト</sup>年<sup>ト</sup>其<sup>ト</sup>自<sup>ト</sup>然<sup>ト</sup>無<sup>ト</sup>授<sup>ト</sup>其<sup>ト</sup>去<sup>ト</sup>來<sup>ト</sup>仕<sup>ト</sup>苦<sup>ト</sup>之<sup>ト</sup>受

其<sup>ト</sup>年<sup>ト</sup>其<sup>ト</sup>自<sup>ト</sup>然<sup>ト</sup>無<sup>ト</sup>授<sup>ト</sup>其<sup>ト</sup>去<sup>ト</sup>來<sup>ト</sup>仕<sup>ト</sup>苦<sup>ト</sup>之<sup>ト</sup>受

字食浦之字

元禄四年

川端惣兵衛

其<sup>ト</sup>年<sup>ト</sup>其<sup>ト</sup>自<sup>ト</sup>然<sup>ト</sup>無<sup>ト</sup>授<sup>ト</sup>其<sup>ト</sup>去<sup>ト</sup>來<sup>ト</sup>仕<sup>ト</sup>苦<sup>ト</sup>之<sup>ト</sup>受

日年其<sup>ト</sup>

田井傳兵衛

日浦五又鉞

作左衛門

四郎右衛門



久兵衛

甚右衛門

八右衛門

高崎平吉及

寺和俊右衛門及

菅原頼浦五右衛門及寺和俊右衛門及

申合釣籠之覚

一向後頼宗倉浦野根甲浦他田并同田之共他浦之

繩左へ船不入之及

一野根甲浦字喰頼浦右四ヶ浦之攝師仕出之繩左外

相遠追る詮一切之釣籠入相仕之及

右喰遠吉一右相定共自然無擾義出来仕之々々遠近記相仕

右周知飯豆 右先申之通可仕之及

右先申之通可仕之及 右先申之通可仕之及

右先申之通可仕之及 右先申之通可仕之及

本文之次第  
証文並立

甲浦実食  
頼浦右三ヶ

浦迄師仕  
本云云と

アリ本文に  
相遠追る詮

後之事  
右喰遠吉

右周知飯豆  
右右浦和

右先申之通  
可仕之及

右先申之通  
可仕之及



水打渡仕打極中少令相遠山望有了又取中依石

如件

元禄四年

东二月十日

甲浦云云

高木重吉

吉松儀右衛門

重右衛門

吉郎右衛門

源次右衛門

源次右衛門

兵助

宝食浦云云

川端惣右衛門

日浦年表

田井傳兵衛及

新浦云云

高橋重右衛門

日浦年表

田中睦右衛門

横山左兵衛及

本文を弟記文  
曰立致和ハ新浦  
地下役を先ト宛  
宝食浦地下役を  
後ト宛宝食浦地下  
役名下ハ細字にて  
右日文言ハ之別  
張ニ遣スト有



自國他國之船河名竹之島并於甲浦、破換、刻浦  
手形書、附字倉甲浦之書、智化字

土州安壽歌安壽浦之太郎進船去月六日之夜

高田竹之島、内室、及破換船物揚着物

竹之島、并二子之島、打拘依、浦手形、儀為

此書、此書、文通、習、互、於、竹、之、島、之、進、系

字、中、若、受

一、自、今、以後、河、國、之、船、之、河、名、竹、之、島、亦、令、全、月、分、  
破換、船、有、之、時、之、子、島、并、物、船、物、揚、着、也

根、元、之、破換、不、片、付、字、倉、浦、之、支配、浦、手、形、書、等、也

一、日、土、名、島、高、塚、清、一、切、甲、浦、分、之、破換、船、有、之、時

二、子、島、并、物、船、物、揚、着、之、時、其、是、又、根、元、之、破換、不、

片、附、甲、浦、之、浦、手、形、書、等、也、其、之、受

一、右、中、合、相、定、之、子、細、之、此、島、之、不、限、南、海、往、來、之、也、船、往、

也、其、不、急、之、船、之、進、之、并、旅、人、之、等、煩、早、速、切、明、也、其、

其、之、不、急、之、子、細、之、依、之、相、決、也、其、度、也、其、之、



遠孔仕置可申度

右通互中合受如件

長禄四年

未之月八日

甲浦子

川端忠兵衛

日年奉

田井傳兵衛

日五入子

他右衛門

四郎右衛門

久兵衛

甚右衛門

八右衛門

甲浦子

島崎平右衛門

日年奉

吉松儀右衛門

甲浦子 寄信片 仕世之語之文之寫

土州安在形安在浦在右郎廻船去月方之夜半因



竹之向之内意之及破換船物竹之流岸  
打揚依之浦手形之儀為水打鏡也之文通勢之互換  
竹之向之遠系岸中合度

一自今以後河志之船之少之在河志竹之島又之金目分  
磯邊之破換船有之時節之修之岸物船糟未揚ル  
根之破換船片附寄信浦之支配浦手形之儀  
度

一因土州寄島儀岸一切甲浦之磯邊之破換船在之  
時之修之岸物船糟揚物有之其是又根之破換  
取片附甲浦之浦手形之儀

一右中合打定之細之此度之不限南海諸来之迎船儀之  
進度不意之難達之節候又之吾煩早速揚明也度  
此度之岸物船之儀之相鏡之儀之度之互之遠儀  
竹之向中合度

右之通(中合不如何)

甲浦之儀

島崎要吉



口年考  
昔松後右衛門  
口五人記

元禄四年

兵右卫

未古月八日

与攻兵衛

浦右衛門

古郎左衛門

重右衛門

害官浦左衛門

川端忠兵衛及

口年考  
田井信右衛門

二子高之事

元禄四年末七月五日大苦志五兵衛及河越之時於甲浦  
別條荒以上書共一和亦目掛高右衛門持之受

安喜浦左郎船破損不扱之事

元禄四年末五月廿日之夜安喜浦左郎船及破損

積荷櫓木船糟竹ヶ島并二子高揚中島竹ヶ島

大杉高久右衛門惣田九右衛門空信浦左衛門川端忠兵衛

老田井信兵衛又与高右衛門共又与高生上政役人上



有海部亦内浦次右邊の同道云同七百竹ヶ島東  
破換船の沖船取惣右邊の兼甲浦船宿位左郎の浦中  
形の甚く苦也亦苦一札竹ヶ島は是れ案文人等不其前日於  
水分一層惣右邊の位二郎の位を以て右に案文持案位  
に附尚浦の役大坂本新島系孫右邊の惣元、八分冬  
竹ヶ島二子島、揚物有、今渡取甲浦に廻浦手形は  
下修云と書船取惣右邊の兼甲浦位二郎判右  
且大巨宛所有能く水困船の者一当浦に水位二郎  
右張面仕渡其時去方忠と渡取、年取、年以、二  
子島編渡の極地仕、去村の津州、阿波分、の成る  
身以新島孫右邊の兼、其不能不存、お渡、之右  
案文案系、船取惣右邊の兼位二郎、本張り竹ヶ  
島、是れ為中、竹ヶ島、孫、内、年、新、案、多、去、破  
換、手、少、過、仕、宿、居、川、彼、渡、合、仕、竹、水、出、端、ら  
不、急、水、地、忠、水、役、入、苦、常、画、川、形、判、換、有、能  
孫、此、方、手、浦、手、形、入、中、儀、是、何、分、船、主



左方即方破換之故中書於五日之内可獲賊船  
之水近於待也之為中州能令同曉之字喰之各年  
前多分亦方及儀右樹之方古書狀中賊船格之各部  
破換船浦手形喰喰甲浦之何より望次牙と中州  
得共船中格船主と左右中書を写す中州  
待船格と有る中浦手形如く格之何れか  
賊船其返り之如信也希るも船頭惣右樹に不  
中分の中州船主系に近於待從是而中州入と返状也  
中州日夕延至右方格中窺中州との相續言新  
兵船亦方史回夜野根浦と云賊船何れと書本中書次及  
中州破換成急角中州下中州窺可格との何れも中  
兵船羽立方三日之延立言知、新中州事

一月新中州船主於中州下中州窺信格私其大  
中州格中州國令之船破換之時之字寫之揚物有是  
阿兵古中州甲浦裁利又阿兵船破換之時之  
後揚物有是共甲浦上每届字喰之裁利余國船



右辨之弟在甲浦寄信有所より裁新此等事を先  
方系引不仕口之二子高き揚物流に携彼方此方  
流案あり方支記此中極に中へと新信付由然に二子流  
に立ル同前と存在在畏り事

一翌二日之寄信を各各年案あり共之書状を極に急  
務に通破換之船を来りし頃より水へ石連なり中計  
後日書合可中計打案お被有る方中其の事其返  
るに及後人上流より来りし追身極に可中裁し使に上

中東書

一因七日之寄信を各各年案使に裁り極に急に  
出候由身得其意に通返書せり事

一同八日此方分竹に後日出候中入救事左内儀右場  
兵左支字復々城下郡市下役等送來事右場海部改  
役又本内流改右場之各層惣兵衛年案信之  
甚右場之他右場之四郎右場之久兵衛八左支之友  
其外浦又親々左和共中者之各層年案



人より内甚右衛門作左衛門ハ左史竹ヶ島葛又右人  
 此中平言以種ハ此方より相入左新本ハ此言右北有云々  
 委成りハ甚道本ハ甚右衛門本ハ内孫改右衛門ハ可出念免  
 悟言種年ハ相承由竹ヶ島系考以後相承ハ中ハ史  
 一宮食年左史無御後且少ノ度安無浦左左郎竹ヶ島  
 室ハ此ハ破換付竹ヶ島葛又左集右改役人ト連  
 回道言船頭惣右衛門甲浦市治三部竹ヶ島上津浦年形  
 可考ハ此ハ左史一札如此ハ右史トモ未又出ルハ此  
 甲浦取留新有ハ船頭中核船主トモ考リ少トモ一  
 裁り言ハ此近相待ハ核トモ考定言左史儀右衛門  
 披免云云ハ此ハ史障ハ新史近ト考ルハ其後多浦  
 年形出ハ却ハ此漢書中トモ考リ少トモ考ルハ此  
 言ハ此ハ破換ハ船甲浦年形新史出ハ甚道  
 日ハ此ハ甚道有付ハ竹ヶ島系考ハ此言右史相物史  
 言ハ少ハ此言ハ好云ハ此言意ハ此上言ハ此ハ此  
 存考ハ不有ハ此中世ト惣考中ハ附此言ハ其其似



此乃板也打鐵化先可中中先先先亦存可集也

中中乃生是能也方分中出中中中中中

一初昔中中板去二子活之等身板今年以前其以國之

孫右邊之及里村新助及也方之上腰半右邊之

字倉甲浦之字倉之字半右邊之金兵衛中板之末

或何角中由阿良様市代之上佐守代之水入現中

身以内沙之相研之度と水五之強様之也之等

と存然有阿波土依船市之各別司船市之用之船

其外並國之廻船市は度也去之船之等々在之

時時多及能活り多之可然り右水應之水也等々也

而指明分を在之立司等以後阿良船破後して之

之島、揚物有之昔甲浦上無福字倉分裁判又土依

船右之通之り之字倉上無之由甲浦之裁判余國船

時去之也之合之先其りて之如何又之字倉之之入揚物有

之破船之何之何國船之其等之方方之也



浦中船身お利に仕りしと申す事より申す

一物無御下振をりしと申す事より申す

是より申す事より申す事より申す

換付を裁判可仕と申す事より申す

換付を破換之より申す事より申す

目より破換之より申す事より申す

換付と申す事

一物若し船より申す事より申す

是物より申す事より申す事より申す

是物より申す事より申す事より申す

是物より申す事より申す事より申す

是物より申す事より申す事より申す

是物より申す事より申す事より申す

是物より申す事

一物若し船より申す事より申す

是物より申す事より申す事より申す



文律年引込有難書何ふは多々此書は現判命  
想言船持系云云連云云申付度

一平吉文某文此書皆之向、字高其外、傳は荷物  
船槽亦揚り苦根元、破換不片付、支配浦手形、  
書はれ、互云、張、為、ある、事、故、を、此、外、に、有、る、事、と、想、言、  
揚、り、荷、物、甚、な、物、一、回、に、申、付、然、不、傳、之、揚、り、格、又、之、に、内、格、手、  
形、と、の、片、可、入、揚、見、と、取、退、良、有、一、張、者、申、付、格、五、又、亦、其、  
申、格、段、之、然、不、片、と、何、片、分、上、取、片、載、及、申、格、遠、近、  
此、段、申、付、字、高、半、破、換、不、片、付、可、格、由、申、付、申、付、申、付、

船、揚、物、浦、手、形、然、り、字、被、多、事、者、入、載、及、申、格、遠、近、  
申、付、互、に、張、文、通、了、相、式、申、付、申、付、破、換、船、荷、物、申、付、片、  
何、片、何、片、と、揚、り、船、形、之、張、入、申、付、浦、手、形、申、入、申、付、之、張、書、  
を、申、付、尾、の、船、申、付、申、付、申、付、申、付、申、付、申、付、申、付、申、付、  
浦、手、形、申、付、申、付、申、付、申、付、申、付、申、付、申、付、申、付、  
申、付、故、破、換、船、之、船、頭、水、至、其、為、孫、儀、を、申、付、申、付、申、付、  
船、之、申、通、之、竹、時、根、元、破、換、不、片、浦、手、形、申、通、を、用、在、申、



船主荷主と相渡り奉る通に有る不致文を各隠探詰  
時々碇張りふ中々中々又惣意衝右の根元と浦年  
形に甲浦式と字儀とを揚物有る各別浦年形書  
と書影の如く船形水主共全致矢多或は中甲年  
有る多時々多お渡成あると中甲年と書文極中  
り

一右書文と書とを相物此方又と兵書と中甲核甲浦式  
と分切又総致在る内又と字儀他書化我中書人核と  
承り書儀と石残は右の如く張り四人の核と書と  
其上と書とを中甲書と書と一可核と書と双と  
退出書儀と中甲書時我中書中核と書と及中核  
此儀と書と人書儀とと存と書と不竹の書と文披免と入と上  
と書と状可と書と中甲核と知と書と中核と書と又と書と  
御中甲浦式と書と兵書と書と近と書と中甲核と書と破  
換船と書と者承と書と滞留書と書と此中核と書と附書と書と境  
目と書と書と我中書と近と書と中甲核と書と存存と書と附被



亦主者有欲者存之正其度之亦高揚抑流抑之  
左之正不操自身目前之正之正新裁者之延引  
不若之正之正

一在夏終止人亦能左樹心始之望之加出化之格之雷生  
存知之通双多之各各年亦心安身信謬之於今日各各  
之道理之正不亦亦片半半之事涉之何幾大既存之  
能左樹心中始之正

一私共中格定道理之正中之時之於之亦高揚抑四五之年以  
前止其其日浦十右樹舟及破換之正共之亦之其操之亦  
裁判之正之正之正之正之正之正之正之正之正之正之正之正之正  
之正之正之正之正之正之正之正之正之正之正之正之正之正之正  
神役之者神樂之奏之甲浦之者其氏神目前之祭  
業之其道理中之正之時之正之正之正之正之正之正之正之正之正  
之正之正之正之正之正之正之正之正之正之正之正之正之正之正  
操之代之正之正之正之正之正之正之正之正之正之正之正之正之正  
之正之正之正之正之正之正之正之正之正之正之正之正之正之正



過族を及中、君志方州、強氣仕掛、其方、

者、堪忍加、格、地、人、志、年、中、付、格、毎、新、中、

後、其、意、隨、心、如、此、中、付、

一、惣、兵、中、格、在、格、可、有、中、格、年、以、前、宗、高、

宗、信、者、以、了、細、也、中、甲、浦、人、出、合、散、喧、荒、仕、者、

其、日、有、と、中、事、

一、亦、老、文、中、其、儀、三、格、年、近、了、宗、信、細、以、在、

格、門、を、以、新、人、質、取、来、也、宗、細、子、三、七、を、其、方、又、

質、取、系、羽、子、三、七、人、を、流、入、津、水、新、越、也、方、

右、格、門、を、つ、水、疾、さ、せ、被、是、書、信、又、老、年、者、免、

吾、弟、然、と、中、格、以、つ、水、也、云、是、不、終、と、左、也、方、成、也、

竹、之、高、退、也、仕、

一、竹、之、高、分、新、物、也、格、本、新、兵、衛、宗、孫、也、格、右、也、亦、文、

按、免、の、中、格、也、仕、形、也、存、也、新、格、根、浦、也、本、中、

宗、信、及、中、格、而、親、可、能、也、格、誤、也、之、明、九、日、末、の、新、兵、衛、

宗、信、越、也、宗、信、也、通、也、我、取、也、中、格、也、中、宗、信、及、







次身此方之子據曰始有今之官初為中舍等如  
此中書之乃浦手形其後有各之乃了返狀等  
載之在書中事

右之通此處之乃乃之族兩者之言其和也中書  
利之儀其各之言其乃之禮也且又於今以前彼  
後事其乃乃之禮也上禮軍右禮之及前野金兵衛及  
其附之乃乃之乃乃之八十年以前細代之內內編一  
其編於禮根浦白井之助及右松其乃乃之乃乃之  
乃乃之乃乃之乃乃之乃乃之乃乃之乃乃之乃乃之  
乃乃之乃乃之乃乃之乃乃之乃乃之乃乃之乃乃之

書中書







